# マルティン・ファン・ブライネセン著
# 『アーガー・シャイフ・国家：
# クルディスタンの社会・政治構造』(2)

山　口　昭　彦

齋　藤　久美子

武　田　　歩

能　勢　美　紀

（共　訳）

**Martin van Bruinessen, *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London and New Jersey: Zed Books, 1992 (A Japanese translation, part 2)**

This is a Japanese translation of *Chapter* 1 of Martin van Bruinessen's *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan* (London and New Jersey: Zed Books, 1992) and a continuation of our Japanese translation of the *Preface* and the *Introduction* of the same work which appeared in the last issue (*Seishin Studies*, vol. 127, June 2016). Chapter 1 starts by giving general information about contemporary Kurdistan, including geography, the geopolitical situation, population, economic activities, language, and religion. The author then traces major developments of Kurdish nationalist movements in Turkey, Iraq, and Iran from the 1960s to the 1980s. As the book was published more than two decadesago, naturally some points need to be updated to match the current situation. However, it should be also underlined that this chapter is largely based on Bruinessen's own fieldwork and that, when using a secondary source, the author does not fail to meticulously check it against his own observations.

## はじめに

本稿は，マルティン・ファン・ブライネセン『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』（Martin van Bruinessen, *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London and New Jersey: Zed Books, 1992）の「第１章　クルディスタン概観」を訳出したものである。本書の学術的価値や日本語への翻訳の背景については，「マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(1)」『聖心女子大学論叢』第127集（2016年６月）の冒頭に付した「訳者解題」の中で記したとおりである。

「クルディスタン概観」と題されているように，第１章では，地理，地政学的状況，人口，経済活動，言語，宗教など，現在のクルド社会を理解するための基本的情報が提供され，ついで1960年代から1980年代までの各国におけるクルド人問題やクルド民族主義運動の動向が，その相互関係を含めて詳細に論じられている。

前稿で述べたように，本書は，もとになった博士論文の脱稿からはすでに40年，本書刊行からも20年以上の時間が経過しており，内容的には古くなってしまったところもある。とくに，本稿で扱う「クルディスタン概観」については，1980年代までのデータや著作にもとづいて記された部分もあり，現状とは大きく異なるものも含んでいる。この点，著者自身のその後の研究や，過去20年の間に発表された，より若い世代による研究を参照することが必要であることはいうまでもない。

他方，概観とはいえ，本章の内容もまた著者のクルディスタン各地での現地調査に基づいた，オリジナリティーの高いものであることを改めて強調しておきたい。二次文献を参照している部分があるとしても，かならず著者自身の知見に照らして批判的に取り上げられている。ついでながら，本書発表に先立つ1980年代，著者は，当時，現代中東のさまざまな問題を

取り上げ，専門家による良質な分析を紹介していた*Middle East Report*にクルド人問題の動向を紹介するレポートを相次いで発表するなど（たとえば，Bruinessen 1984, 1988），すぐれた現状分析者としての顔ももっていたことを付記しておきたい。

前稿に引き続き，本稿もまた，共同執筆者を主なメンバーとするクルディスタン研究会による訳出作業の成果である。

訳文中，「(著者名 発行年)」や「著者名（発行年)」といった形で言及される文献については，本稿の末尾に参考文献一覧として掲載した。また，[　] 内は，訳者による説明や補足を示している。

（文責　山口　昭彦）

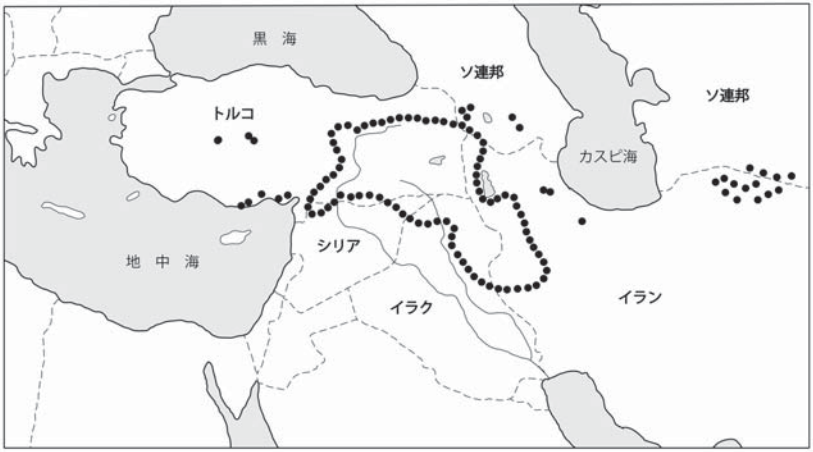
# 第１章　クルディスタン概観

## 地　理

中東においてクルディスタン（「クルド人の土地」）は戦略的な位置を占めており，トルコ，イラン，イラク，シリアの重要な諸地域を含んでいる。現在にいたるまで，クルディスタンという名の国家が存在したことはない。オスマン帝国では，クルディスタンなる呼称はクルド人が居住する地域の一部（ディヤルバクル州）を指すものとして使われていた。同じくイランにはコルデスターン［クルディスタンのペルシア語読み］と呼ばれる州が存在するが，同国のクルド人居住地域のおよそ３分の１を含むにとどまる。地図２は，クルド人が住民の多数派をなす地域を大まかに示したもので，1948年にクルド民族主義者たちが国際連合に提出した地図によっている。機会があるたびに自分でも確認したが，正確なものだった[1]。本書でクルディスタンという場合には，この地図に示された地域を指している。ここで言うクルディスタン以外の地に暮らすクルド人も多い。イラン北東部のホラーサーン州とそれに隣接するソ連邦下のトルキスタン諸地域にも数十万人規模のクルド人の大きな飛び地があり，ソ連邦のアルメニアとアゼルバイジャン，トルコ西部にも重要な集住地が存在する。トルコ西部のなかでもとくにエーゲ海沿岸から地中海沿岸に広がる綿花栽培地や大都市では，労働移動によりクルド人の数が急速に増え続けている。

クルディスタンの中心部をなす険しい山脈は，侵入する軍勢を防ぎ，迫害された者や盗賊たちに避難場所を提供してきた。その背骨を構成するのが，東タウルス（クルド・タウルス）山脈やザグロス山脈であり，だいたい北西から南東へと延びている。南西側には，多くの場合，高く険しい褶

[1] ただし，もとの地図ではバフティヤーリー族やロル族もまたクルド人とされているが，これについては正しくないと考え，修正した。もとの地図は，さまざまな出版物で転載されている。たとえば，Rambout 1947，Vanly 1970.




地図 2.　中東におけるクルド人

クルド人が多数派を占める地域

クルディスタン以外の主なクルド人集住地

曲がいくつも平行して走っており，メソポタミア平原に向かって緩やかに下っている。北部および北東部にいくと，ステップ状の高原や台地へと景観が変化する。巨大なヴァン湖の北にある高原は，ユーフラテス川やティグリス川の源流となっており，住民の多くがアルメニア人であったことから，アルメニア高原と呼び習わされてきた。クルド人がそこに暮らすようになったのは，せいぜい過去数世紀に過ぎない。第一次世界大戦期に多数のアルメニア人が強制移住や虐殺にさらされ，その他のほとんどがこの地から逃げたために，この高原にももっぱらクルド人が居住するようになっている。南部の低地や東部の高原が，クルディスタンを画する自然の境界をなしている。このことは，クルド人が山岳部におけるすぐれた戦士であるのに対し，隣接する南部のアラブ人や東部のアゼリー・トルコ人たちが平野での戦闘に長けているという事実を反映している。北西部では，こうした明確な境界は存在せず，クルド系住民とトルコ系住民が徐々に混じり合う。クルディスタンの南東側の境界はかなり恣意的である。そこに住むロルとバフティヤーリーの諸部族はクルド人と多くの文化的特徴を共有し

ており，多くのクルド民族主義者たちは彼らがクルド人であると考えている。私としては，レキー方言を話し，一般的に自らをクルド人とみなすロル族のみをクルド人とする。そのほかのロル族には，そうした傾向はない。

大陸性の気候と高い標高のために，クルディスタンの冬はことのほか寒い。12月から２月にかけてかなりの雪が降り，山岳部では多くの村が孤立することになる。４月になっても大雪のために通信がひどく妨げられることもある。クルディスタンで急速に森林破壊が進んだ原因の一端は，こうした厳しい冬にある。というのも，毎冬，多くの木が切られて暖房用に燃やされるからである。イランとイラクだけは安く灯油が手に入るが，そこでも一般的には木材が燃料としてなお使われている。ヤギもまた，灌木や若木の緑の部分を食べて，枯らしてしまうなどの害を与える。１世紀前，クルディスタンの中心をなす山岳部の多くが森林に覆われていたことは，旅行記から明らかだが，いまでは，これら森林のうち残っているのはわずかである。その行き着く先は明白で，もはや森林による保水と水の調節機能がなくなって，渓谷部でも土壌が浸食され，生産力が失われることになる。クルディスタンは地震帯に位置し，ほぼ毎年，クルディスタンのどこかしらが地震に見舞われている。最近も，1975年７月にリジェ（ディヤルバクルの北東）で，また1976年11月にはムラディイェ（ヴァンの北）で大きな地震が起こった。いずれも多数の死者を出し，メディアによれば，それぞれ４千人と１万人であったとされている。多くの場合，貧弱な通信手段や政治的要因のために，被災地への援助が適当な時期に届かないか，あるいは全く届かないこともあり，そのために犠牲者の数が劇的に増えてしまうのである。

たとえば，ムラディイェでは，地震直後よりもむしろ後になって多くの人が亡くなった。テントが送られても届かないために野外で過ごすことを強いられ，多くが文字通り凍死したのである。食料や他の援助物資が送られても，被災地に届く前に消えてしまった。家畜にえさを与えられなくなった村人たちはやむなく家畜を手放し，その結果，災害を生きのびた者たち

の多くが経済的には破産したのであった。

## 地政学的状況

クルディスタンは容易に人を寄せ付けず，しかもその住民が勇猛な戦闘能力をもっているがゆえに，周辺に現れる帝国の自然の境界となった（第３章参照）。これらの帝国はいずれも，クルディスタンの一部でしか統治権を維持できなかった。かくして，クルディスタンは，周辺国家の政治的境界によって分断されることとなった。現在のイランとトルコ・イラクとの国境を定めたのは，オスマン帝国とペルシア帝国［サファヴィー帝国（1501－1722）］との戦争であった。第一次世界大戦で英仏が占領したイラクとシリアはオスマン帝国から切り離された（第４章参照）。これらの国家間の国境はクルディスタンを４つの地域に分割し，部族の居住地域を切り裂くことも多かった。ここでは，これら4つの地域を，トルコ・クルディスタン，ペルシア（イラン）・クルディスタン，イラク・クルディスタン，シリア・クルディスタンと呼ぼう。クルディスタン自体を横断しないものの近接するもう一つの重要な国境が，ソ連邦の国境である。この国境がクルディスタンと隣接するがゆえに，ソ連邦の指導者と資本主義世界の指導者の双方がクルディスタンに関心を寄せ，このことは，20世紀のクルディスタンの歴史にとって重要な結果をもたらす事実であった。クルディスタンとは直接国境を接しないが，明白かつ多大な関心を寄せているのがイスラエルである。クルド人とアラブ人が対立すると，クルド人は当然，同盟を結ぶべき相手に見えるからである。イラクのクルド人指導者バールザーニーは，1967年以降，おそらくはもっと以前から，イスラエルの財政支援を得ていた。

ソ連邦を通過するルートをのぞけば，ヨーロッパからアジアに入る二つの自動車道があり，いずれもクルディスタンを通る。また，イスタンブル＝テヘラン，イスタンブル＝バグダードといった主要な鉄道ルートがクル

ディスタンを通っている。

きわめて重要な油田が採掘されているモースル，キルクーク，ハーナキーンがいずれもイラクに位置するのは，偶然ではない。大英帝国が政治的実体としてのイラクを創設したのは，まさにこれらの油田のためであったからだ。小規模ながら，シリア北東のルマイラーンやトルコのバトマンでも油田が採掘されている。クルディスタンに相当量存在する他の鉱物としては，クローム，銅，鉄，石炭，褐炭がある。

## 人口

クルド人の推定総人口については，かなりの幅がある。人口調査では，クルド人はそれとして別個に算定されないか，あるいは，「クルド人」という定義がかなり狭く限定して（たとえば，トルコ語を全く話さず，クルド語だけを話す者に限定するといった具合に）使われるために，数えられるのはごく一部ということになる。たとえば，1955年に実施されたトルコの人口統計は，総人口2400万[2]のうちクルド語話者を150万人としているが，これは，当時トルコに暮らしていたクルド人の半分以下の数字である。その後，トルコで発表される統計はクルド人に全く言及しなくなった。少なくともクルド人の存在は認める他の国々でも状況は同じである。したがって，ごくおおざっぱな人口推計しか挙げることができない。表1.1は，1975年の推計であるが，それ以前の古い統計に基づいている。

## トルコ

1970年の郡（ilçe）ごとの人口統計結果と各郡の人口に占めるクルド人の割合の推定値から私が計算したところによれば，1970年にトルコ・クルディスタンには570万人のクルド人が暮らしており，あるいは，1975年には，

[2] 国家統計研究所『1955年国勢調査』アンカラ，1956年。

総人口が13％増加したことを加味して修正すると，650万人のクルド人が暮らしていたことになる。これに，トルコの他の地域で暮らすクルド人も加える必要がある。ヴァンルは，1965年時点で，トルコの他の地域に暮らすクルド人の数は150万人であると推計し，1975年には220万人になっているとした。この推計の正否を確認することはできなかったが，私が大都市や沿岸地域を旅した際の印象からすると，少なくとも100万人，おそらくはそれ以上のクルド人がいた。したがって，1975年にトルコにおいて750万人のクルド人がいたというのは，妥当なところか，むしろ控えめのように思われる。注意すべきは，［トルコ・］クルディスタンでの国勢調査では数えられない者も多くいると，クルド人たちはしばしば主張するが，調査方法を考えれば，あり得ない話ではないということである[3]。最近（1985年）の人口調査の際，東部諸県では，トルコ西部に移住した者が多数いるにも拘わらず，他の地域に比べてより急速な人口増加が見られた。したがって，総人口のなかでのクルド人の割合は増加し続けているのである。

## イラク

私の知る限り，最近のもので信頼できる統計は一切ない。1922－24年と1935年の国勢調査ではクルド人の数がおそらくは信頼できる形で数えられていたが，そこでクルド人はイラクの総人口のおよそ23パーセントを占めていた[4]。この割合は，長年にわたるイラク・クルディスタンでの戦乱や，イラン系と見なされたクルド人がイラク政府によってイランに追放されたために，わずかに減少したかもしれない。1975年におけるイラクの総人口はおよそ1100万人であったので，とりあえず私としてはクルド人の数を

[3] 国勢調査は，５年に一度，10月のある１日に，十分な訓練を受けていない大量の調査員／面接官によって実施される。トルコ・クルディスタンでは多くの村が２日以内に県庁所在地から到達できないために，そこでの国勢調査はあまり周到には行われていない可能性が高い。私が出会った遊牧民たちは，調査を受けたことがないと語っていた。

[4] Wilson 1931: 18n; Field 1940: 104–5.

200万から250万と見積もる。ヴァンルは，最近の公式の統計や県知事への聞き取りによる情報を用いつつも，クルディスタンにいる非クルド系少数派を過小評価し，他の地域のクルド人を過大に見積もることで，310万人と推計しているが，私が思うにあまりに多すぎる[5]。

## イラン

1956年と1966年の国勢調査はクルド人を別個に数えていない。しかし，人口のざっと10パーセントがスンナ派ムスリムとして登録されている[6]。これが意味するのは，クルド人が人口の優に10パーセント以上を占めていたということである。クルド人をのぞけば，さして多くないトルコマン人やいくつかの小規模の少数派集団のみがスンナ派であり，他方で，ケルマーンシャー州の多くのクルド人やホラーサーンのクルド人全員がシーア派である。半ば公式の『イラン年鑑』[7]は，1970年代初頭には300万のクルド人が，1975年には自然増により350万のクルド人がいたとするが，これが受け入れ可能な最小の推計値である。実際の数値はもっと高いかもしれない。ヴァンルによるやや偏った推計は，1965年には450万人，したがって1975年には580万人としている。

## シリア

ここでも，様々な推計がなされるが，その多くは，総人口の8.5パーセ

---

[5] Vanly in Chaliand 1978: 227–32.

[6] 1966年の国勢調査は以下の文献にその概要が示されている。*Almanac of Iran* 1975（Tehran, 1975）: 336.

[7] *Almanac of Iran 1975*: 428.同じ数字が，それより前の年についても提示されており，したがって最初にこの推計が行われてから３，４年間の人口増加を加味して修正を行った。そのため，私は350万と推計している。

[8] Dam 1979: 15は，同書28ページに引用される人口学的研究に基づいて8.5パーセントという数字を挙げている。Nazdarは，1976年の人口として82万5000人，すなわち11パーセントと推計している（Chaliand 1978: 309–12）。

ント，すなわち，1975年時点で60万人をちょうど越えるあたりで上下する[8]。

ソ連邦

公式の数値によれば，およそ10万人。

以上の数字を要約すると，表1.1のようになる。

**表1．1　1975年の人口推計**

| | 総人口（百万） | クルド人（百万） | % |
|---|---|---|---|
| トルコ | 40.2 | 7.5 | 19 |
| イラク | 10.5 | 2-2.5 | 23 |
| イラン | 34.0 | 3.5 | 10 |
| シリア | 7.3 | 0.5 | 8.5 |
| ソ連邦 | | 0.1 | |
| 合計 | | 13.5-15 | |

**経済：農業，季節移動をともなう半遊牧，遊牧**

多くの人がクルド人について抱くイメージに反し，遊牧民はクルド人のごく一部である。多くが若干の家畜を飼うとはいえ，大多数は農民である。一般的な作物は，小麦，大麦，レンズ豆（以上，主食），トマト，メロン，キュウリ，タマネギであり，青野菜や果物は地域ごとに異なる。山岳部では生存水準以上に生産されることはほとんどなく，平野部では余剰が出るほど穀物が生産される。イラク・クルディスタンやシリア・クルディスタンの平原は，それぞれイラクやシリアの穀倉地帯である。重要な換金作物は，タバコ（特にディヤルバクル東部やイラク北部）や綿花（トルコ・クルディスタンのいくつかの地域にごく最近導入された）である。

多くの例外があるものの，一般的に言えるのは，山岳地帯の農民は自らが耕す土地を所有しているのに対し，平野部では土地は他の者に所有されており，その場合，都市在住の不在地主であることが多い。平野部の農民は，最近（1950年代または60年代）まで，しばしば分益小作人であった。つま

り，彼らは独立して耕作し，地主に収穫物の一定割合（状況に応じて10パーセントから80パーセントまでさまざまであった）を支払っていた。そのほかは農業労働者であり，地主かその差配の監督下で働いてわずかな賃金を受け取っていた。1950年代に農業機械が徐々に導入されはじめたことで，分益小作的な慣行を廃止する方向へと変わってきた。こうして分益小作人たちは農業労働者となって，１年のうちわずかな期間だけ雇われるようになった。そのために，季節的あるいは永久的な移住が進んでいる。別の要因により，山岳部の村でも同じような事態が生じている。そこでは土地が少ないうえに，すべての息子に父親の財産に対する同等の取り分を与えるイスラム法の相続規定の結果として，土地は，１家族を支えるにはあまりに小さい土地片へと細分化される。交易条件の悪化により，農民のおかれた状況はさらにひどいものとなった。衣類や道具といった必需品，あるいはライフルやラジオなど奢侈品のために，農産物の形でいっそう多くを払わねばならない。仕事がないのに現金が必要とされるために，多くの家族が身内の１人またはそれ以上を集約農業が行われている地域や産業発展地域に季節労働者または移民として送り出すのを余儀なくされている。いずれの地域もクルディスタンの外にある。山村経済が改善する見込みは，まだあまり望めない。換金作物の多くは地域の市場でしか売れない。交通網が貧弱なために輸送費用が相対的にかさみ，その結果，他の市場にもっていっても太刀打ちできないのである。地元で操業する加工工場は存在しない。タバコだけは例外かもしれない。土壌も天候も好条件で，クルド地域産タバコへの需要は高い。しかし，タバコは，クルディスタンを抱える国家においては専売品であり，その栽培はわずかな地域でしか認められていない。

山岳部や丘陵の村では，依然として木製の枠に鉄の刃をつけた犂を牛（場合によってはラバ）に引かせて耕し，刈り取りは円形鎌や大鎌で行う。平野部ではほぼどこでもトラクターやコンバインが使われている。それらが到来したことで，生産関係は大きく変わった。一般に，中小の地主にはそ

れらを購入する余裕はない。大地主には可能だが，よく見られるのは，都市の事業家が農業機械を購入し，地主たちに収穫の一定割合（８パーセントか10パーセント）と交換で貸し出すというものだ。しばしば，こうした事業家は貸金業者でもあり，借り手の地主は借金の返済が終わるまでみずからの土地を収穫の50パーセントの利率で貸し手の事業家に貸し出すことを余儀なくされている。かつての分益小作人たちに残された仕事はほとんどないということになる。

村人たちの家畜はもっぱら羊だが，山羊や，ときに牛もあり，幼い子供か雇われた羊飼いが番をする。完全に定住化した村では，十分な放牧地がないためにごくわずかな家畜の群れがいるだけだ。農耕と遊牧をあわせたより本格的な混合経済が見られる村もある。群れは比較的大きく，春には羊を連れて村ごと（あるいはその大部分が）山麓にある夏営地に出発し，そこに天幕を張って暮らす。村から夏営地までの距離は，数時間から数日までさまざまである。村の耕作地で仕事があると男たちは村に戻るが，すぐに家族のいる天幕に戻る。このような限定された形の（半）遊牧を，民族誌学の文献では移牧という。本書で「半遊牧民」という語は，移牧を実践する者たちを指している[9]。こうした経済活動に従事する村は，平地ではなく，山麓の丘か山裾の低いところに位置するのが一般的である。そこでは夏はうだるような暑さになり，人々は，家畜のためばかりではなく，自分たちも新鮮で澄んだ空気をもとめて山の牧草地（北部方言ではゾザン，南部方言ではクーヒスターンと言う）に行くのだと言う。羊をまったく飼っていない村人でさえ，他の者たちについてゾザンに行きたがる。かつては，ジズレやアマーディーヤといった町の住民も，暑い夏の数ヶ月を高地にある野営地で過ごし，そこに天幕や枝葉で作った小屋を建てた。

完全な遊牧民はまれになりつつある。かつて遊牧民であった者の多くが自主的または政府の強制によって[10]定住化し，遊牧生活を続ける部族に属

[9] こうした経済活動については，Hütteroth 1959に優れた描写がある。彼は，山岳の牧草地を意味するトルコ語のyaylaという語にちなんで，これら半遊牧民をyaylabauernと呼んでいる。

しながら個人的に定住した者も多い。いまなお遊牧生活を送っているのは，イラクではアルビル平原に冬営地をもつヘルキー族の一部だけであり，イランでは，イラクとの国境に近いケルマーンシャー西部にあるカルハーニー族や同じ地区の他の部族の一部だけである。トルコには，いくつかの遊牧民がおり，ジズレ郡に冬営地をもつ部族や，ウルファ県ヴィーランシェヒル郡に冬営地をもつ者もある。彼らの夏営地は，クルド・タウルス（ヴァン湖の南）やディヤルバクルの北東にある山岳地域である[11]。

これら諸部族の遊牧生活は，かなり限定されている。彼らは冬をずっと１カ所で過ごし，春には最初の夏営地に移る。部族の大部分は，山の牧草地を２つか，あるいは最大３つもち，順番に利用しているようだ。私が訪問した遊牧民は２つの異なるテントをもっていた。暖かく贅沢なものは冬営地用で，１年を通じてそこに立てられたままであった。移動の際に用いるのは，軽い方である。いずれも，小さな違いはあるにせよ，中東地域一帯で見かけるのと同じ黒い天幕である[12]。冬営地か，その近くに家を建てた遊牧民もいる。このように，遊牧民と半遊牧民との違いはそれほど明確ではない。しかし，一般的には，遊牧民は強制されなければ農業に従事することはない。私が訪問したテイヤン族は，冬営地の近くに可耕地をもっているが，これを耕すのは部族に属さない分益小作人である。遊牧民はま

---

[10] トルコもイランも，それぞれアタテュルクとレザー・シャーの時代に遊牧民に対して強制的な定住化政策を推進した。Beşikçi 1977, Salzmann 1971を参照のこと。こうした政策はけっして新しいものではない。早くも17世紀初頭にオスマン政府は遊牧民を定住化させようとした（Orhonlu 1963）。明白な定住化政策の他にも，遊牧民に定住を強いる他の政治的な要因もあった。とくに国境の策定は，冬営地や夏営地が複数の国にまたがって存在する遊牧民たちに移動経路を変更するか，あるいは定住化するかを迫った。

[11] クルド・タウルスの遊牧民や彼らの移動経路は，Hütteroth 1959に見事に描かれている。トルコのジャーナリスト，フィクレト・オトヤムは，遊牧民のベリタン族や彼らの多難な状況についての興味深い報告を書いたが，はじめ『共和国』紙に掲載され，その後，本として転載された（Otyam 1976）。社会学者ベシクチは，最大のクルド系遊牧民エリカン族と社会変化の諸問題に関する興味深い論文を書いた（Beşikçi 1969a）。

[12] ピーター・アンドリュースとムガル・アンドリュースには，クルド人の黒い天幕は，杭が天幕の天井を下から支えるのではなく，天幕の天井をつき抜ける形で杭をうち，紐で杭と結ぶことで天幕を支えるという点で，アラブ系，一部のトルコ系，パシュトゥーン系など他の遊牧民のものとは異なるという事実に気づかせていただいた。実際，クルディスタンだけではなく，ホラーサーンでも，すべてのクルド系部族のテントにあてはまることを発見した。

た半遊牧民よりも長い距離を移動し，はるかに大きな群れをもつ。半遊牧では牧草地が限定されているために，大きな群れをもてないことは明らかだ。他方，遊牧は，他の諸条件次第で，80頭から200頭と推定される最低限の頭数の羊を１世帯が所有する場合にのみ存続できる経済活動である。

遊牧民は，頻繁に村人や都市の商人と交易関係をもつ。過去においては，ほしいものを手っ取り早く手に入れる略奪という手段がこうした関係を補っていた。村人や商人にチーズやバターを売ることができるが，需要は多くないし価格も低い。儲かる商品は羊毛や屠殺用の家畜であり，遊牧民はその両方を仲買人に売るが，仲買人たちが遊牧民に支払うのは，町で売る価格のごく一部にすぎない。

## 他の経済活動：工芸／産業と交易

### 開発と低開発

どんなに未開な条件の下でも，人々は，自ら作りだすことのできない（少なくとも作りだすことのない）加工品を使っている。たとえば，ある種の織物，家屋の部品，農具，台所用品，奢侈品などである。20世紀初頭まで，クルド人の村ではほとんどの加工品を自給自足でまかなっていた。つまり，それら加工品は各家庭で作られるか，住んでいる村や近隣の村にいる専門職人の手で作られていたのである。クルディスタンでは専門技術の多くを少数派のキリスト教徒やユダヤ教徒が担っていた。村は完全な自給自足ではなく，クルディスタン各地の町との間につねに一定の交易関係をもっていたし，これらの町を介して世界的な交易システムとも繋がっていた。ディヤルバクル，ビトリス，ヴァン，アルビル，モースル，サナンダジュ，その他，多くの小都市が工芸と交易の中心地となっていた（たとえば，３章で触れる17世紀のビトリスの描写を参照）。一般的に，これら町の住民はだいたいにおいてクルド人ではなかった。町は，かつても今も，こうした経済活動の中心地であるのみならず，統治機構（知事，裁判所，警察，軍）

の所在地であり，宗教教育の中心地でもある。典型的な都市の工芸は，武具作り，宝石細工，革なめし職人であった。とはいえ，20世紀初頭まで村と町との交渉はそれほど活発ではなく，多くの加工品は地元で作られていた。

20世紀，2つの要因によって，工芸は急速に衰退もしくは消滅へとむかった。第1の要因は，大半とは言わないまでも多くの職人が消えたことである。先にも述べたように，工芸の多くはキリスト教徒やユダヤ教徒といった少数派によって担われていた。第一次世界大戦中にアルメニア人に対する大規模な強制移住や虐殺が行われると，他のキリスト教徒たちも迫害を受け，クルディスタンから避難した。いまやごくわずかなキリスト教徒が残るばかりで，ことにトルコ・クルディスタンではそうである。イスラエル建国後は，ユダヤ教徒のほとんどがクルディスタンを離れてイスラエルに向かった。いなくなった職人たちの代わりを務めるだけの技術をもつクルド人はほんのわずかであった。

中央クルディスタンの伝統的衣装（şal û şapik［文字通りには「ズボンと上着」の意］）の素材となる見事な毛織物は，今もわずかに残るアルメニア人コミュニティーでのみ作られている。少数派のキリスト教徒たちはまた，優れた園芸技術ももっていた。彼らの村を奪ったクルド人たちが，段をなす山腹の地所や複雑な灌漑網を維持・修復できないのはよくあることだ。とりわけ中央クルディスタンで，こうした光景を目にする。

二つ目の要因は，国際的な交通網の発達である。早くも1830年代には蒸気船による輸送が黒海で始まり，安価なヨーロッパ製品がアナトリアの市場を席巻しはじめた。19世紀末にはドイツ企業がイスタンブル＝バグダード鉄道の建設を開始し，20世紀初めには西クルディスタンまで開通し，その結果，この地域との間での輸送が劇的に容易になった。まずはアナトリアの大都市で安価な外国製品が入手可能となり，そこから徐々にクルディスタンに浸透し，地元製品に取って代わるようになったのである[13]。自動車道路の建設がこうした事態に拍車をかけ，第二次世界大戦後の合成物質

の登場がさらに加速させた。金属は陶器に取って代わり，ついでプラスチックが金属に取って代わった。また，安価な機械織製品が手織物を駆逐するなどした。さらに，新たに持ち込まれた多くの新製品が必需品と見なされるようになった。

こうして工芸技術や職人技が村から次第に姿を消した。クルディスタンの町では，消えるか，消えつつある手工業もあれば，繊維，皮革，金属加工といった単純な機械工業へと姿を変えていったものもある。しかしながら，こうした産業ですら，西部トルコ，バグダード，テヘラン，あるいは国外の先進的な産業と競争するのは難しくなっている。社会資本の欠如，輸送費の高さ，その他の要因が，それらに不利に働くのである。生存競争において，クルディスタンの機械工業は，国の中心部以上に厳しく労働者を搾取することを強いられている。社会立法の網の目をくぐる行為が大規模に行われているのである。

こうした事態は，仲介業者の増殖にもつながっている。行商人たちは，ドイツの剃刀，中国，香港，日本，インドの小物，インド，日本，イギリスの織物，中国の石油ランプ，そして自国の首都からはそこで作られた石鹸，ビスケット，砂糖菓子，その他多くの製品を村に運んでくる。通常，これらは都市の小売店主から購入されたものであるが，これら小売店主は大商人から，大商人は首都にいる輸入業者から卸売りによって買い，輸入業者は外国に注文するのである。場合によっては，さらに多くの仲介業者が介在することもある。村の産品は同じく一連の仲介人によって大都市に届くが，それぞれの仲介業者が高利を得ている。

トルコやイランの州都では，こうした仲介業者とは別に，外国企業の代

[13] 産業によっては，こうした影響はかなり早くから見えていた。1840年頃，宣教師バジャーが記すところによれば，数年前には中央アナトリアのトカトの町で栄えていた「多数のキャラコ捺染工場」が，リヴァプールやマンチェスター産の安価で良質な輸入品に対抗できず，「ほとんど姿を消した」という（Badger, 1: 23）。1838年に黒海蒸気船に乗って旅したフォン・モルトケは，船が100万マルク相当の工業製品を積んでいたと記している（Moltke 1882: 199）。すでにバジャーが記しているように，新たな交易路が開かれたことで，とくにディヤルバクルやビトリスなどかつては重要な交易拠点であったクルディスタンの大きな町のいくつかはその重要性を失い始めていたのである。

理人をしばしば見かける。こうした代理人は，協調融資や専門知識といった会社の援助を受けて店を開き，その会社の製品だけを販売しようとする。代理人にとってその方が安全で利益の上がる投資だし，会社にとっては地元や外国の競争相手を駆逐するのにいい方法だからである。だいたいにおいて，商取引が，これらの町がかつてもっていた固有の産業機能に取って代わりつつあるのである。

これらは，発展というよりもむしろ低開発と呼ぶべき事態が進行していることを示している。産業の発展は阻害されており，クルディスタンは，それをうちに含むそれぞれの国家の中心地に，そしてそれらを介して世界の産業の中心地に強く依存するようになった。通信網の構造がこのことを明解に指し示している。それは，経済交流の中から生まれたネットワークではなく，集権化を急ぐ各政府の行政上の必要性から生まれた人工物である。小道によるものをのぞけば村は互いに結びつけられることはなく，地域の中心都市と結びつけられ，それらを通じて，州都や首都に結びつけられている。クルディスタンの村はどこであれ，そこから他のクルドの村に行くよりもむしろアムステルダムに行く方が楽である。100キロほど離れた別の村に住む親戚を訪ねようとすれば，村人たちはしばしば県都や州都に行ってから別の州都あるいは県都に向かい，そうしてはじめて村に到達することができる。こうして200キロから300キロを旅せねばならないのである。

こうしたネットワークのために，イラクのクルド民族主義勢力にとっても，通信はきわめてまどろっこしいものとなっていた。というのも，県都はイラク政府の手にとどまっていたからだ。たとえば，バーディナーンは冬，実質的に孤立し，そのため飢餓に苦しむことになった。同様に，スライマーニーヤ地域からさらに北のバーリク地区に移動するゲリラ兵はイラン領内の県都や州都を通らねばならなかった。というのも，イラク・クルディスタンの県都を迂回する適当な道がなかったからである。

その結果，クルド人たちの中には，隣接するわずかな村以外は見たこと

もないまま，いまではイスタンブル，ドイツ，オランダの産業中心地で働いている者も多い。土地が少なく，仕事がないために彼らは村を離れたのだが，実際クルディスタン自体には彼らを雇う産業がまったく存在しないのである。皮肉にも，クルド系資本も同様の経路をたどる。裕福な者は，まれではあるが土地をもっていればそこに投資し，また，農業機械，商業，あるいは国の中心部にある産業資本に投資する。このように，クルド人のプロレタリアートもクルド人の産業資本も存在するが，いずれもクルディスタンの外にある。もちろん，このことはクルド民族主義にも影響を与えている。たとえば，イスタンブルのクルド人労働者たちは，漠然とした民族主義的アピールに結集するよりもむしろ，階級的基盤に寄りながらトルコ人労働者と連帯する傾向がある。他方で，クルディスタンの低開発は原初的忠誠をいっそう永続的なものとし，その結果，こうした忠誠がクルド民族主義運動に影響を与え続けているのである。

クルディスタンの外で産業発展の中心都市が拡大したばかりでなく，クルディスタン内部でも都市が発展した。クルド人はいまやほぼすべての場所で他の民族集団を数の上で上回っている。こうして都市に移り住んだ者の多くが，行商人，靴磨き，物売りなどとしてインフォーマル部門で生計をたてようとしている。学歴がある場合は，安月給の役人としての職を見つける者もある。失業率は高く，これらの町に新たに移住してくる者はあまりなく，去っていく者もある。そのため，多くの場合，人口はかなり安定したものになっている。

## 言語

クルド語は，イラン語派の北西または南西グループに属する言語である[14]。いくつかのグループに分類可能な様々な方言が存在するが，それら

[14] 一般的にはクルド語は北西イラン語であるとされていたが，マッケンズィーがこの説に異議を唱え，クルド語が実際には南西イラン諸語とより多くの共通項をもつ可能性を示した（MacKenzie 1961b）。

は互いに理解できないか，あるいはごくわずかしか理解できない。

1．通常，クルマーンジーと呼ばれる北部および北西方言。（南部の諸部族のなかには，みずからをクルマーンジュと呼ぶものがあって，そのため，南部グループに属するにも拘わらず，自分たちの言語をクルマーンジーと呼んでおり，混乱を招きかねない。）

2．しばしばソーラーニーと呼ばれる南部方言。ただし，正確に言えば，ソーラーニーというのはムクリー方言やスレイマーニー方言など多くの方言を含む南部グループに属する諸方言の一つに過ぎない。

3．スィネイー（サナンダジー），ケルマーンシャーヒー，ラキーなど南東方言。これらの方言は，上記二つのグループの諸方言に比べ，現代ペルシア語により近い。

これらの方言グループは，語彙や音韻体系の点で相当の違いがあるのみならず，いくつかの文法的特徴の点でかなり異なっている。たとえば，他動詞の過去時制の扱い方[15]，南部方言にのみ見られる分離受動態動詞語幹の存在，そして，母語話者のみならず部外者にとってもとりわけ印象的なのが，南部方言においてeweという接尾辞が頻繁に使われることである。後者の違いは，おそらくグーラーニーがソーラーニーに与えた影響に由来するのであろう。これら3つの本来のクルド語方言に加え，イラン語派の別のグループ（マッケンズィーによれば北西イラン諸語）に属する二つの

[15] Bynon 1979を参照。マッケンズィーの優れた方言研究（1961a）は，南部グループの諸方言や，北部グループと南部グループの間の移行地帯の諸方言を主に扱っている。これらのグループ間の相違に関する彼の観察は，管見の限り，最も優れたものである。いくつか簡単な事例を挙げれば，これらの方言グループの間でかなり相違があることがわかるであろう。

| | 私はパンを食べる | 私はパンを食べた |
|---|---|---|
| 北部クルド語 | ez nan dixwem | min nan xward |
| 南部クルド語 | min nan exom | （min）nanim xward |
| 南東クルド語 | min nan exwem | （min）nan xwardim |
| | 私はあなたがよく見える | 私はあなたがよく見えた |
| 北部クルド語 | ez te çê dibînim | min tu çê dît |
| 南部クルド語 | min tû çak ebînim | （min）çakim tû dît |
| 南東クルド語 | min tû çak ebînim | （min）tû çak dîm |

-imと-îは，それぞれ一人称単数と二人称単数の接尾辞で，xward-とxwe-/xo-は「食べる」の過去語根と現在語根，dît-とbîn-はそれぞれ「見る」の過去語根と現在語根である。

言語がクルディスタンでは話されている。すなわち，ザザとグーラーニーである。ザザは，北西クルディスタンの多くの部族が話すが，少なくとも３つの異なる下位グループがある。すなわち，大デルスィム（トゥンジェリ，エルズィンジャン，ビンギョルやディヤルバクルの一部を含む），スィヴェレク，ムトゥキー（ビトリスの近く。ムトゥキーにはザザ方言話者の飛び地があるだけだが，彼らの方言は，他のものとはかなり異なっている）である[16]。ザザ方言話者は，クルマーンジー方言をかなり容易に話せるようになるのに対し，クルマーンジー方言話者がザザ方言を話そうとしても，きわめて難しい。南部・南東クルディスタンには，グーラーニーまたはマショー（後者は，これらの方言で「彼は言う」に相当する語である）としてひとまとめに知られている方言を話す地区がいくつかある。この言語は，おそらくかつてはもっと広い地域に分布していたであろうが，今では，ハウラーマーン，つまりケルマーンシャーの西にある山岳地帯のダーラーフー地区や，イラク・クルディスタンのあちらこちらに残るだけとなっている[17]。これまでザザとグーラーニーは相互に関係があるとみなされてきたが，私が思うにその根拠は薄弱であるし，結論を出すには時期尚早とい

[16] ザザ方言の唯一の本格的研究は，オスカー・マンによって収集され，カール・ハダンクによって分析された方言テキストからなっている（Mann and Hadank 1932）。これらの資料はなお不十分である。マルミサニジュ編のザザ方言とそれを話す諸部族の文献一覧が，クルド語文化誌『Hevi』第３号，114－7ページ（パリ・クルド研究所，1985年２月刊行）に掲載されている。文献の中で，ザザ方言話者が自らの言語をDimiliと呼ぶという指摘をしばしば見かける。この名称が音位転換によってDaylamiに由来することが東洋学者たちに一般的に受け入れられており，これは，第２章で部分的に要約されているように，クルド人の起源を論じる際に証拠として使われてきた。しかし，ザザ方言話者のインフォーマントたちの多く（とくにムトゥキーやエルズィンジャン）はDimiliという名前を聞いたことがなく，また，その名を知っている者の何人かは，ヨーロッパ人の研究者から間接的に聞いただけであった。ザザ方言地域の西部に暮らす者だけが，自らをDimiliと呼んでいるようだ。

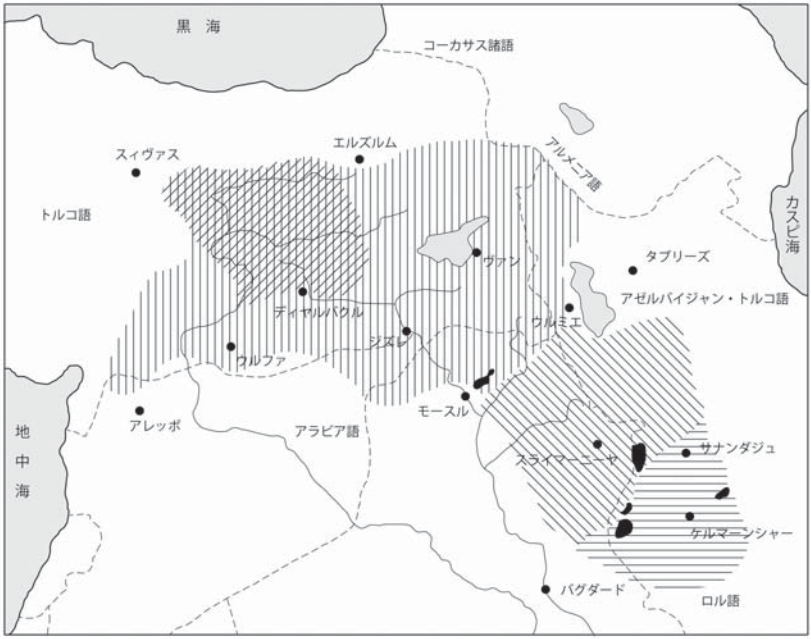
[17] グーラーニー諸方言に関する研究：ハウラーマーン方言は比較的よく記述されている（Benedictsen and Christensen 1921, MacKenzie 1966, Mann and Hadank 1930）。最後のものは，他のグーラーニー方言に関する資料を含んでいる。グーラーニーの文学テキストはソーンによって出版・分析され（Soane 1921），モハンマド・モクリーは古いグーラーニー方言による多くの宗教書を編集，翻訳，注釈した（Mokri 1970, 77）。イラクのクルディスタンにおけるグーラーニー方言話者の住む地区の数や大きさは，これまで言われてきたものより大きいようだ。モースル東部のバージラーン族のほか，ハーナキーン地区にも点在し，また，モースルの北部および北東部の諸地域のチャバク族，シャルル族，ゴラーン族，さらには，かなり大きなザンギャネ族やキルクーク州のカーカーイー族の多くの者がこのグループに属する諸方言を話している。

うことになるだろう。私は，これらの方言を聞くたびに違いが多いことにいつも驚いて，それらについて未熟ながらノートをとった。今日にいたるまで，とくにザザ方言に関しては，発表された資料があまりに少なく，はっきりしたことは言えない。

地図３は，上記方言グループが話されるおおよその地域を示している。ただし，厳密な境界は存在しないことに注意してほしい。方言は徐々に入り交じり，ある方言を話す集団が，別の方言の話者が多数を占めるところで生活している場合もある。多くの地域では，ザザ方言とクルマーンジー方言を話す諸部族が生活空間を共有しているのである。

## 宗教

多くのクルド人は正統スンナ派ムスリムであり，４つのイスラム法学派のうちシャーフィイー学派に属している。この点で，クルド人は，隣接する非クルド系集団と区別される。というのも，トルコのトルコ人やクルディスタンのすぐ南に住むアラブ人たちも大半がスンナ派ムスリムであるが，ハナフィー学派に属し，また，アゼリー系トルコ人，ペルシア人，ロル人はシーア派だからである。とはいえ，クルド人がみなスンナ派で，シャーフィイー学派というわけではない。クルディスタンの南部および南東部の縁辺では（ハーナキーン州やケルマーンシャー州），いくつかの大きなクルド系諸部族や，おそらくはそこのクルド系住民の大半が，イランで国教となっている正統十二イマーム派シーア派だからだ。イランのシーア派クルド人たちは，より北に住むスンナ派のクルド人たちが1920年代，1946年，そして1979年以降の数年といった時期に民族主義的な活動を展開したときも，いつも距離を置いてきた。ただし，イラクでは，1960年代や1970年代に民族主義運動に参加するシーア派クルド人が増えた。したがって，宗教的な要因は重要ではあるが，政治的同盟や対立において，それ自体決定的なものではないように思われる（Bruinessen 1981参照）。




地図 3.　クルディスタンの諸方言

北部方言　　南部方言

ザザ方言　　南東方言

グーラーニー方言

正統シーア派およびスンナ派イスラムの他に，クルディスタン各地に異端的で混交的な宗派があり，そこには，古いイラン系やセム系の宗教，過激シーア主義（ghulat）や異端的スーフィズムの痕跡を見いだすことができよう[18]。もっとも大規模な集団は，クルディスタン北西のアレヴィーである。異端の度合いはさまざまで，スンナ派による圧力や宣伝の影響を長く受けてきたものもあれば，とりわけデルスィムのアレヴィーのようにほ

[18] これらの宗派一般に関しては，Müller 1967を参照。
[19] デルスィムのアレヴィーについては，Bumke 1979を参照。アレヴィー主義の異端的側面を強調する研究として，Trowbridge 1909とMélikoff 1982.

とんどイスラムとは呼べないものもある[19]。クルド系アレヴィーの多くが，ザザ方言話者であることはしばしば指摘されてきた。その通りであるが，クルマーンジー方言を話すアレヴィーもいるし，また，トルコのアレヴィーの大半はクルド人ではなく，トルコ人である。反対に，ザザ方言話者のごく一部がアレヴィーである。

南及び南東クルディスタンには，アフレ・ハック（「真実の人々」）またはイラクではカーカーイーと呼ばれる，別の異端的宗教集団がいる。ケルマーンシャーの東にあるサフネ周辺や西にあるケレンド周辺，またキルクークの南の諸地区にある現在のアフレ・ハックの各コミュニティーは，今の南クルディスタンやロレスターンに相当する地域一帯にあった，はるかに大きなコミュニティーの名残であろうと思われる。上記のコミュニティーのうち，後の二つに属する多くの者がグーラーニー方言を話す。このことは，ザザ方言とアレヴィーの間に見られる同様の結びつきと照らし合わせると，興味深い。ここでも，結びつきはきわめて不完全であり，グーラーニー方言を話す者が皆アフレ・ハックではないし，アゼリー系トルコ人やペルシア人であるアフレ・ハックも多い。アレヴィーとアフレ・ハックは，いずれも輪廻や，神が人間の形をとって代々化身となって現れることを信じており，彼らの儀礼の多くは類似している[20]。

３つめの異端的宗派は，ヤズィード派（クルド語ではÊzîdî）であり，しばしば「悪魔崇拝者」と侮蔑的で不正確な呼称で呼ばれる。明らかに過激スンナ派宗教集団として始まったヤズィード派は，過激シーア主義の宗派と多くの共通点をもつが，それら以上に非イスラム的である。この信仰はクルド人の間にのみ見られ，信徒はクルマーンジー方言を話す[21]。彼らは周りのムスリムたちから常に厳しい迫害を受けてきており，そのため多

[20] アフレ・ハックについては，Minorasky 1920, 1921, 1928, 1943，Ivanow 1953，Edmonds 1957: 182–201; 1969を参照。

[21] ヤズィード派に関する基本文献として，Layard 1849: 1, 275–309; Layard 1853: 1, 46–95（レヤードは，シャイハーン地区のヤズィード派指導者たちとごく親しく，ヤズィード派のためにイスタンブルで請願をした）；Menzel 1911, Lescot 1938, Drower 1941, Edmonds 1967, Furlani 1940.

くが故地を離れ，またイスラムやキリスト教に改宗した者も多い。在地のキリスト教徒との関係は，ムスリムとの関係よりもおおむね良好で，イスラムよりもキリスト教への改宗を好んでいるようだ。私が会った，最近イスラムに改宗した者たちは，彼ら自身，あるいはその両親がキリスト教に改宗した元ヤズィード派信徒であった。

ヤズィード派信徒は，とくにモースルの南西，イラク＝シリア国境にまたがる山岳部や，シャイフ・アディーの聖廟がある，モースルの東部シャイハーンに集中している。1830年代や1840年代に，多くのヤズィード派信徒が，迫害のためにシャイハーン地区を離れ，ロシア領コーカサスに定着した。スィンジャール，シャイハーン，コーカサスは，今もヤズィード派の主要な居住地となっている。トゥール・アブディーン山脈やバトマン付近などトルコ・クルディスタンにもヤズィード派の村がある。多くのヤズィード派信徒が，ムスリムによる絶えざる迫害から逃れるために，そこから移民労働者としてドイツに移住した。

クルド人たちの間には，常にキリスト教徒やユダヤ教徒のコミュニティーが存在し，しばしば専門的な職業に従事してきた。たいていの場合，彼らは政治的・経済的に従属的な地位にあった。というのも，多くのクルド系部族長たちは，自分たちの村にいるキリスト教徒の農民や職人たちを自らの私有財産と見なしていたからだ。今もなお「わがキリスト教徒(filehen min)」と言う者がいる。ロシアやイギリスが身勝手な理由でこれらの集団を保護したが，そのことは，これらキリスト教徒が繰り返し虐殺を受ける口実として利用された。虐殺を生き延びた者たちの多くがより安全な地域へと逃げたため，これらの集団のうち，今もなお残っているのはごくわずかである。

ヨーロッパの介入が始まる以前，クルド人の間には３つのキリスト教徒の民族･宗教集団があった。アラム語あるいはアラビア語を話すスーリヤーニーはシリア正教，すなわちヤコブ派教会に属し，おもにトゥール・アブディーン，ジャズィーラ，北西クルディスタンの多くの町に暮らしていた。

アーシューリー（アッシリア人）もアラム語を話すが，東方キリスト教会諸派の一方の極をなすネストリウス派教会に属した。彼らはバーディナーンやハッキャーリなど中央クルディスタンやウルミエ湖周辺の平野部に居住していた。独自の言語と独自の教会－いわゆるグレゴリオ教会－を有するアルメニア人は，最大のキリスト教集団であり，クルディスタン一帯のみならず，クルディスタンの北部や西部の境界もはるかに超えて居住していた。

早くも17世紀には，フランスのカトリック伝道団がこれらキリスト教コミュニティーの間で布教活動を開始した。フランス王がオスマン帝国のカトリック系臣民すべてを保護する権利をオスマン宮廷より得たことで，改宗させることに成功したのであった。多くのアルメニア人が改宗し，アッシリア人のうち西の半分が改宗した。アッシリア人の場合は，改宗後，カルダーニー（カルデア派教会）と呼ばれた。1830年代，イギリスとアメリカの伝道団が，ネストリウス派にとどまっていたアッシリア人の間で活動を開始した。このことは，キリスト教徒とムスリムの間での緊張を高め，第３章で述べるように，数年後におきたネストリウス派キリスト教徒の虐殺にもつながったのである[22]。

トゥール・アブディーンにおいても，カトリックとプロテスタントの伝道団が活動していたが，それほどは成果を上げられなかった。スーリヤーニーの大半は，ヤコブ派にとどまった。大規模な虐殺は，第１次世界大戦まで起こることはなかった。1915年，東部アナトリアからアルメニア人を強制退去させるべしとの命令が発せられた。アルメニア人たちは法律上の保護を失い，オスマン兵やクルド人たちによって虐殺された。迫害はまもなく他のキリスト教コミュニティーにも拡大した。生き残ったキリスト教徒，とりわけトゥール・アブディーンや中央クルディスタンのキリスト教徒の多くは，戦後，イギリス委任統治領およびフランス委任統治領として

[22] アッシリア人に関する卓越した研究として，Yonan (1978) も参照。スーリヤーニーについては，Anschütz 1984を参照。

創設されたイラクとシリアに逃げた。イギリスとフランス当局は，クルド人の統制を目的としてこれらキリスト教徒の中から警察部隊を徴募したために，これらキリスト教徒とクルド人との間の緊張を高めた。

虐殺を生き延びたアルメニア人の多くは南部コーカサスに向かい，そこでアルメニア共和国建設を助けた。なお，シリアやイラクに暮らす者もいるが，彼らは大戦中にオスマン朝によってそこに送られた者たちか，あるいはその子孫である。また，世界中に大挙して移住した者もある。トルコ東部に残った者は，ごくわずかであった。トルコ・クルディスタンのスーリヤーニーのコミュニティーも消えつつある。隣接するムスリムたちによる迫害や，他の地域での経済的な機会のために，こぞってイスタンブルや外国へと移住したのである。

## クルド民族運動：1960－85

本書は，クルド民族運動の研究を意図したものではないが，ところどころでクルド民族運動に言及している。第４章と第５章では，クルド民族主義の初期の動向が，シャイフの政治的役割と関連づけて論じられる。その後の展開についてはあまり体系的に言及しないので，ここで，過去25年の主要な諸事件の概要を提示しておくことは有益であろう。

第１次世界大戦後は，中東の他の地域と同様，クルディスタンにおいても熱狂的に政治活動が行われた時代であり，トルコだけではなく，イランやイラクにおいても繰り返しクルド人の反乱が起こった。しかし，これら３国はいずれもクルド民族主義を鎮圧することに成功した[23]。イランやイラクのクルディスタンは1920年代末までに平定され，トルコは1938年に最後の大規模なクルド人反乱を鎮圧した。トルコは，クルド人に対する対応においてもっとも非妥協的であり，反乱を暴力的に弾圧したうえに急進的

[23] 1920年代及び1930年代におけるクルド人の反乱とそれらに対する弾圧については，Rambout 1947, Kinnane 1964, Arfa 1966, Jwaideh 1960: 383-670, Kutschera 1979: 39-129, Bruinessen 1983.

な同化政策をも実施した。その成功は，隣国の同化政策以上に長く続いた。イラクとイランでは，第２次世界大戦を機にクルド人の運動が再び盛り上がりを見せた。秘密結社が創設され，ムッラー・ムスタファー・バールザーニーに率いられた1943－44年の北部イラクでの武装反乱は小規模なものではあったが，イラク，さらにはイランの都市部に住むクルド系住民の中には，これに呼応し支持する者もいた[24]。

イランでは，中央政府の弱体化やアゼルバイジャンを占領していたソ連軍の寛大かつ扇動的とも言える態度に促されて，マハーバードがクルド民族主義運動の拠点となった。1946年に，マハーバードのクルド人たちは，隣接するアゼルバイジャン［当時，イランのアゼルバイジャン地方でも自治要求運動が活発化していた］をまねる形で，共和国として独立を宣言した。彼らはイラクのクルド人にも支援され，そこには千あるいは二千の武装した部族民を率いるバールザーニーも加わっていた。共和国は1年たらずで崩壊した。というのも，ソ連軍がイランから撤退し，強力な保護がなくなると，樹立間もないクルド共和国の軍隊では，イラン軍に対抗することはできなかったのである。ムッラー・ムスタファー・バールザーニーとその配下の者たちはイラクに撤退し，他の者たちは降伏した。大統領カーズィー・ムハンマド，その弟サドル，いとこサイフィー・カーズィーは死刑を宣告され絞首刑となった。民族主義者たちの政党（KDP：クルディスタン民主党）はほぼ解体し，わずかに小さな秘密グループが生き残った。バールザーニーは北部イラクでもちこたえられず，トルコ＝イラン国境に沿って長い行程を進みソ連へと向かった[25]。バールザーニーと，彼に同伴した500人のものは11年間ソ連邦において難民として生活することとなり，バールザーニーとカーズィー・ムハンマドの名は彼らが実現することのできなかったクルド人の悲願の象徴となった。

次の10年，クルド民族主義運動は，階級に依拠した政治運動に譲る形で

[24] Kutschera 1979: 133–53, Jwaideh 1960: 671–708.
[25] マハーバード共和国については，Eagleton 1963, Kutschera 1979: 153–84, Jwaideh 1960: 709–74.

社会勢力としては衰えたように見えた。トルコでは，新たな複数政党制が多くの利益集団を活発な政治活動へと引きつけ，相当な政治動員が起こった。イランとイラクもまたそれぞれ社会的・政治的不安をかかえ，1950年代初頭には，クルド人の農民たちが両国において地主に対する反乱を起こした。流れは，これらの国々へのクルド人の政治統合へと，また民族対立よりもむしろ階級対立へと向かっているように見えた。しかしながら，1960年代には，まずイラク・クルディスタンで，ついでイランやトルコのクルディスタンでもクルド民族主義が再び台頭した。

## イラク・クルディスタン：1958－78

1958年７月14日，アブドゥルカリーム・カースィムの軍事クーデタにより，イラクの王制と西側寄りのヌーリー・サイード（彼自身もクルド人であった）政権が倒された。それまで地下に潜伏していたイラク共産党，クルディスタン民主党（カーズィー・ムハンマドのクルディスタン民主党のイラク分派）といった諸組織が公に活動することを認められ，バールザーニーにはソ連からの帰国が呼びかけられた。その数年前，おもにクルディスタンのソーラーニー方言地域の都市インテリからなるKDP幹部会は，バールザーニーに対して党名誉総裁の地位を提示し，バールザーニーも受け入れていた。しかしまもなくしてバールザーニー自身，自らがクルド人にとっての唯一の真の指導者であり，代弁者であると考えていることが明らかとなった。数年後に勃発する紛争のきざしはごく初期からあった。バールザーニーは，クルマーンジー方言を話す北部地域の熟練のゲリラ指導者であったが，そこでは部族的な慣習がなお重んじられていた。相対的に洗練された都市住民であり，部族的慣習を重度の後進性と見なす自称社会主義者であり，政治ゲームの公式ルールには精通しているが，自らの大規模な支持者をもたないKDP党員とまったく対照的であった。

カースィムは，KDPとバールザーニーの対立を利用した。カースィム

としては，クルド人の支持は必要であったが，彼らがあまりに力を得ることは望まなかった。彼は，自らの政治権力の基盤をアラブ民族主義者，共産主義者，クルド系からなる連合に求めたが，その連合は不安定なものだった。これら３つのグループの利益は必ずしも正確に一致していなかったので，当初から紛争は不可避のように見えた。1958年７月27日の暫定憲法はその後もイラク共和国の原理原則となってきたが，そこには内的矛盾がある。一方では，イラク国家は，クルド人とアラブ人の連帯及び協力に基づいており，イラクという枠組みの中で両者の民族的権利はともに憲法第３条によって保証されている。他方，イラク国家は，アラブ民族の不可分の一部である（第２条）[26]。言いかえれば，すべてのイラク国民は平等であるが，アラブ人は，クルド人以上にそうであるということだ。クルド民族主義者たちは，後年，エジプト人や他のアラブの「民族同胞」がイラクにおいて完全な市民権を与えられた反面，イランのクルド地域にルーツをもつクルド系イラク国民が望ましからぬ外国人として追放されたという不合理を繰り返し指摘してきた。憲法の規程にあるこうした問題性は，1968年以来政権にあるバース党体制のもとで完全に表面化した。カースィムの時代には，それらはまだ予見されていなかった。カースィムは，クルド人の機嫌をとり，クルド人に約束した民族的（すなわち，主として文化的）権利を与える決意を固めているように見えた。

その間，イラクのあちこちで紛争がおこっていた。共産党の活動家による動員がうまくいったところでは，農民たちは地主たちに立ち向かい，その多くを追放した。クーデタの試み，敵対する軍閥間の衝突，キルクークにおける民族対立があった。早くも1959年に，バールザーニーは，バールザーン地域周辺で長く対立してきた諸部族と衝突するようになっていた。もともと親密であったカースィムとの関係も，カースィムが権力に留まり，新たな同盟を結ぼうと画策し，アラブ民族主義者の右派に徐々に傾くにつれて悪化し，相互不信が高まった。1961年９月，クルド人とイラク軍の最

[26] Vanly 1970: 81より引用。

初の衝突が起こった。カースィムは激しい報復を加え，クルド人とバグダード政府との間で開戦はもはや不可避となった。

クルド紛争は，1963年２月のカースィム失脚の一因となった[27]。当初はクルド人を懐柔しようとしたイラク政府が，その後，彼らとの戦争に引きずり込まれ，クーデタによって転覆されるという，似たような事態が何度か繰り返された。アブデッサラーム・アーレフ（1963年２月）もハサン・アル＝バクル（1968年７月）も，政権につくや，クルド人に友好的な態度と約束を示したが，ほどなくして空軍や地上部隊をイラク北部に派遣するようになった。もはやクルド人たちの要求に同意できないか，同意するつもりがなくなったからだ。わずかな中断を挟みながら，戦闘は1970年初頭まで続いた。交渉も繰り返し行われ，ようやく1970年３月11日，クルド人に地域自治を約束し，国家の運営にも一定の参加を認めるという，すべての当事者に受入可能と思われる協定へと結実した[28]。

クルド紛争を機に，イラクのクルド人がみな政府に対する反対運動に進んで身を投じたと考えてはならない。多くが無関心であっただけではなく，最後の最後までバールザーニーやKDPに対して積極的に戦ったクルド人も少なくなかった。戦争が始まる前からバールザーニーと争っていた諸部族は戦闘を続行し，政府と同盟し共同で作戦を実行した。クルディスタンの他の地域でも，古くからの抗争のため，あるいはより日和見主義的な理由から，政府とともにクルド民族主義者との戦闘に進んで加わろうという部族長が多かった。さらに，クルド民族主義者たちの間でも，バールザーニーとKDP指導部との対立が続いた。両者はそれぞれ，ほぼクルマーンジー方言地域とソーラーニー方言地域に相当する勢力圏をもっていた。両者が地域ごとに権力を分け合うことに同意すれば深刻な問題は回避できたが，実際には，ともに相手を排除しようとした。1964年に指導部が開催し

[27] Schmidt 1964, Adamson 1964, Dann 1969, Kutschera 1979: 200–28.

[28] ３月協定の原文は，Salomon 1970, Hajj 1977: 120–8, Ibrahim 1983: 815–20.また，Jawad 1981, Nebez 1972, Ghareeb 1981も参照のこと。

たKDP中央委員会が，バールザーニーと政府との間で合意された停戦を厳しく非難すると，対立は頂点に達した。反バールザーニー派の急先鋒は，イブラーヒーム・アフマドとその義理の息子ジャラール・ターラバーニーであり，彼らが政治局を掌握していた。これに対し，バールザーニーは委員会の開催を承認せず，独自に党大会を開いて自らに完全な忠誠を誓う新たな政治局を任命した。バールザーニーに忠実なクルド人部隊が旧政治局の本部を襲撃し，イランへと追いやった[29]。この事件は二つの意味で重要である。一つは，バールザーニーが党を掌握し，党の中にも彼に進んでしたがう幹部が相当数いたことである。彼は，旧政治局をその本拠地たるソーラーニー方言地域で軍事的にたたくことができることを示した。もう一つは，これを機に，イラクのクルド運動とイラン当局がはじめて接触したことである。当初，イラン当局は，ターラバーニーやその一派に一定の保護や支援を与えたが，明らかに，それほど間をおかずしてバールザーニーにとってははじめてとなる重火器を提供した。翌年，イランの仲介によりターラバーニーとその一派はイラクに戻り，バールザーニーと和解した。彼らは，ソーラーニー方言地域のクルディスタン南部に改めて拠点を置いて，そこからバールザーニーに対抗し続け，1966年以降は，しばしばバールザーニー側の兵たちと戦闘するようになった。バールザーニーは，ターラバーニーがイラク政府と協力していると非難し，ターラバーニーのことを，クルド人傭兵に対する蔑称であるジャーシュ（「ロバの子」）と呼ぶようになった。当時，こうした非難がどこまで正しかったかはわからない。ターラバーニーは難しい立場にあって，慎重に工作活動を進めねばならなかった。クルディスタン南部にはたしかに彼を支持する者がいたが，バールザーニーもまたこの地域で次第に力を増すようになっていたからである。つまり，ターラバーニーは敵に囲まれており，北部にはバールザーニーの兵，西部と南部には政府軍やそのクルド人傭兵部隊がいたのである。1968年７月，ハサン・アル＝バクルによるクーデタが起こると，ターラバーニーはすぐ

[29] KDP政治局とバールザーニーの不和については，Kutschera 1979: 244–52.

に新大統領との交渉に動いた。大統領自身，クルド人問題の解決を望んでいたからだ。ターラバーニーは大きな政治的成果が得られると見て，バールザーニーを押さえ込もうとする政府軍にも協力したが，一般のクルド人の間でターラバーニーの人気は高まらなかった。バクルは，バールザーニー抜きにクルド人問題の解決はありえないと判断した。３月11日協定はクルド人に平和と自治の約束をもたらしただけではなく，バールザーニーによるイラク・クルディスタン掌握を確かなものとした。ターラバーニーにも，バールザーニーに敵対する諸部族すべてにとっても，一時的にではあれ彼と妥協する以外の選択肢は残されていなかった。

３月11日協定には，諸条項が４年以内に実施されると規定されていた。約束の一部はほぼ即座に実行された。５人のクルド人代表がバグダードにおいて閣僚に任じられ，農地改革が実施された。私の推測するところでは，この農地改革はとりわけバグダードと協力していた地主に影響を与えるものであった。医療制度が僻地にも拡大され，クルド人の教育が急速な進展を見せた。新たに多くの学校が建設され，クルド語によるカリキュラムが開発され，クルド科学アカデミーが設立された。クルド人自治区の設立という，もっとも微妙な問題については，さして進展はなかった。政府とクルド人が自治区の境界について合意に至ることはなかった。クルド人側は，当時クルド人が人口の多数派を占めていたキルクークやハーナキーンといった油田地帯を自治区に含めるよう要求した。中央政府は当然，消極的で，きわめて死活的な資源の管理権を手放そうとしなかった。それどころか，政府はその地域の「アラブ化」に着手し，クルド人を強制退去させ，代わりにアラブ人を送り込んだ。ただし，このことは国際情勢に照らして見る必要がある。イラクはイランの帝国的野心に脅かされていると感じており，西側とも対立していた。1971年，最後のイギリス軍部隊が湾岸から撤退した後，権力の空白を埋めようとしたイランが，湾岸への出入りを制するホルムズ海峡の島々を占領した。イラク＝イラン関係は，シャーによるイラクのクルド人に対する半ば公然たる軍事支援が始まって以降，決し

て良好ではなかったが，いっそう悪化した。同じく1971年，イラクは（英・蘭・仏・米の）イラク石油会社の施設を国有化し，それに対し，西側諸国は経済ボイコットで対抗した。おそらく政府としては，キルクークの管理をクルド人に委ねると，間接的にではあれ，再び西側の手に渡ることになると見ていたのであり，そのためこの地域のアラブ化を急いだのであった。こうした事態の展開によりイラクはソ連邦への傾斜を強め，1972年には友好条約を結んだ。同じ年，バールザーニーはもう一つの超大国［アメリカ］と密かに友好関係を結んだ。そして，イラクでのクルド紛争の再開がみずからの野心を満たすのに有利と考えたシャーは，CIAが密かにクルド人を支援するのを保証し，バールザーニーとキッシンジャーがテヘランで会談することになったのである。

アメリカによる実質的な支援の約束を得たバールザーニーらが，バグダード政府との間で苦痛を伴う妥協を練り上げることにさして関心がないことは，明白だった。さらなる譲歩を求められるだけだったからだ。さらに，彼らとしては，多くのクルド人が移住させられ，バールザーニー自身，何度も暗殺未遂に遭うなど，政府による多くの協定違反を指摘することができた。1973年10月，アラブ＝イスラエル戦争のさなか，バールザーニーはパトロンであったアメリカやイランに対しイラク政府攻撃を提案したものの引き留められた。1974年３月，バグダード政府は一方的に自治法を宣言したが，クルディスタンの相当部分，とくにキルクークとハーナキーンは除外されていた。自治法を拒否したバールザーニーは新たな武力衝突を覚悟した。

その月に始まった戦闘は，未曾有の規模となった。このとき，クルド人たちは多数の重火器を与えられ，外国人専門家による訓練を受けていた。もはやゲリラ戦ではなく在来型の戦争であり，バールザーニーがなお掌握していた「解放区」を広大な戦線で守ろうとするものであった。戦争の結果，数十万の農民が移住を強いられ，その多くはイランの難民キャンプに落ち着くことになった。バグダードや，クルディスタンのなかでも政府の

掌握する地域から多くのクルド人が反乱軍に加わり，ペーシュメルガ（ゲリラ戦士）となるか，クルド側の非効率な政府機関に職を得た。1974年９月，クルド側の前線を強化すべく，イランの砲兵部隊がイラク・クルディスタンに入る一方，標的探索機能のついた新型ミサイルのおかげでクルド司令部はイラク空軍を十分に遠ざけておくことができた。しかし，解放区の経済生活は戦争によって混乱の極みにあった。農民たちは空襲のため畑で働くことを恐れた。クルド人は完全にイランに依存するようになっており，イランの意のままに操られていた。弾薬から主食や衣類まですべてがイランから運ばれたが，蓄えるに十分な量を与えられることはなかった。

この間，1974年に数度にわたってイランとイラクとの間で秘密交渉が繰り返され，1975年３月６日，アルジェでのOPEC総会の場で，シャーとイラクの実力者サッダーム・フセインによって公式の協定として結実した。協定は両者に歓迎されたが，一般的にはイラン側の勝利と見なされた。クルド人を見捨てるかわりに，シャーはシャットルアラブ川の管理やその他国境をめぐる紛争においてイラク側から大きな譲歩を勝ち取った。翌日，イラン軍とその重火器がクルディスタンから引き上げられ，３月８日にはイラク軍が激しい攻撃を開始した。クルド人たちは攻撃にはたえることができたが，長く抵抗を続けることはできそうになかった。シャーとの会見後，バールザーニーは戦闘停止を宣言した。数日でクルド人の運動は瓦解したが，それは軍事的敗北というより政治的敗北であった。クルド地域全体の住民がイランに逃げ，クルド人の指導者たちもイランに避難した。４月初頭までに推定25万のクルド人難民がイランにいた。イラク政府がクルド人の反乱に加わった者すべてに恩赦を提示すると，多くのペーシュメル

[30] 1974-75年の紛争は欧米のメディアによって大々的に報道されたが，いまだ本格的な研究は少ない。Kutschera 1979: 301-33とVanly（Chaliand 1978: 263-87所収）はもっぱら印象に基づくものだ。アメリカの関与は，CIAの活動を調査する院内委員会によるパイク報告がメディアにリークされるまで秘密にされていた。この報告はその後，『CIAに関するパイク報告』（London: Bertrand Russell Peace Foundation, 1977）として出版された。イラク側の公式見解は，後に書籍として出版されたサッダーム・フセインの演説やインタビューの中にうかがうことができる（n.d.: 1977）。

ガが直接降伏し，その後数ヶ月のうちに，これとは別に15万の難民がイランから戻った。イランにとどまった者は国内各地に移住させられ，ゆっくりと同化することが期待された。イラクのクルド人問題は解決したように見えた[30]。

バグダード政府は，一方では自治法を施行しつつ，他方で以後クルド人の蜂起が起こらぬよう抜本的対策をとった。政府によるアラブ化政策が続けられ，クルド側の情報によれば，イラク南部への大量強制移住は早くも1975年半ばに始まっていたという。1976年，政府は，イランやトルコとの国境から10－20キロメートル以内にある地帯からすべてのクルド人の村人を退去させ始めた。これは，サッダーム・フセインが1977年に発表した著作の中で宣言した新たな政策であった。そのうえで，村人たちをキャンプや戦略村に再定住させたのであった[31]。農民たちによる自発的抵抗が起こると，これに政治的に覚醒した都市部に住む若いクルド人たちが加わり，組織化した。かなり小規模ではあったが，数ヶ月のうちに新たなゲリラ戦が始まった。再び山にペーシュメルガがいるとの知らせが広まると，村を破壊された他地域の農民たちや，政府の政策に失望した都市在住のクルド人たちがこれに加わった。

しかし，イラクにおける新たなゲリラ闘争は，クルド人に対するバグダード政府による明白な弾圧への反発であっただけではない。それはまた，クルド人の唯一の指導者としてのバールザーニーの後継者の地位を狙う者たちの間での抗争を背景に起こされたものでもあった。クルド人の抵抗運動を最初に最もうまく組織し得た者が最も有望ということになるからだ。いまわの際にあったバールザーニー自身は，すでにアメリカへと出発していた。先の戦争の間，バールザーニーの名代としてシリアに暮らし，背信のそぶりも見せることのなかったジャラール・ターラバーニーは，機が熟す

[31] これらの政策の一部は，Vanly（Chaliand 1978所収）が簡単に紹介しているが，より詳細には，KDP臨時司令部の『ペーシュメルガ』やPUKの『閃光』などクルド系組織による対外向け出版物のなかで説明されている。農業開発計画に携わっていたポーランド人人類学者が，若干の短い報告を残している（Dziegel 1981）。

るのを待っていた。過去数年，運動の主導権を握っていたバールザーニーの息子たち，イドリースとマスウードはクルマーンジー方言を話すクルド人の多くからの忠誠を期待できたが，バールザーニーの二人の右腕，サーミー・アブドゥッラフマーンとマフムード・オスマーンもまた個人的野心を抱いていた。最初に組織を立ち上げたのがターラバーニーで，クルディスタン愛国同盟PUKは，クルディスタン南部における最初の抵抗拠点と接触し，後にはこれに指導権をゆだねた。1977年，PUK司令部はダマスカスからイラク・クルディスタンに移された。バールザーニー兄弟もこれに倣った。イランで彼らは自分たちの組織を再建し，これをKDP臨時司令部と呼んだ。このうちサーミー・アブドゥッラフマーンの率いる数百人のメンバーは，トルコ＝イラク国境にある基地からゲリラ作戦を開始した。1978年４月，PUKとKDP臨時司令部との間で大きな衝突が起こった。ターラバーニー派がサーミーの司令部を攻撃したが，大きな損害を受けて撃退された。両組織ともにひどく弱体化し，その支持者たちの士気も低下した。次の年，サーミー・アブドゥッラフマーンはバールザーニー兄弟と袂を分かち，自らの組織を立ち上げることになる。彼のライヴァル，マフムード・オスマーンは先にバールザーニー兄弟のもとを離れて自分の組織を立ち上げ，1979年にはPUKからの分派を合わせてクルディスタン社会主義者党とした。しかし，すでにイラン革命がクルド人たちがうまく立ち回るべき国際環境を根本から変質させてしまっていた。

## トルコ・クルディスタン　1960－80

1920年代・30年代に押さえこまれたクルド民族意識が，1960年代にはいると徐々に復活し始めた。こうした事態をもたらした主要な要因のひとつが，イラクにおけるバールザーニーの成功であったことはまちがいない。しかし，トルコ自体における政治的・社会経済的状況こそが，クルド民族主義の再登場を可能にしたのであった。多くのクルド人が村からトルコ西

部の大都市へと移住し，東部と西部の文化的違いやきわめて不均衡な経済発展に気づくことになった。加えて，教育の機会を得て政治化するクルド人の若者たちも増えていった。1961年，トルコはかつてない政治的自由を認める新しい憲法を得た。社会主義政党を掲げるトルコ労働者党が創設され，諸問題のうちでもとりわけトルコ東部の低開発を取り上げ，その原因の一端を過去の反クルド政策に求めた。彼らはマルクス主義の古典に学ぶことで，民族自決の問題を重要課題とするにいたった。トルコ労働者党は，教育を受けたクルド人たちの間に多くの支持者を得て，後にトルコでクルド人の運動が生まれる源泉のひとつとなった。もうひとつの源泉は，伝統的名家出身で教育を受けた者たちが，バールザーニーの影響の下，1965年に創設した地下組織トルコ・クルディスタン民主党であった。

1960年代末までは，二つの潮流が協力して，さまざまなクルド人の町で文化団体を作り，集会を組織していた。1971年の軍事介入後，多くの活動家が逮捕されると，残った者たちは地下に潜ることを余儀なくされた。多くが北部イラクに避難し，トルコでのゲリラ闘争に備えたが，バールザーニーは自らの立場を危険にさらすようないかなる冒険的活動も認めなかった。トルコ・クルディスタン民主党内の対立する派閥の指導者二人が今もって不可解な状況の下に殺され[32]，そのことは，後年，大きな不信を生み出すことになった。

1973年，トルコが議会制民主主義に復帰すると，クルド系組織が急増し，急速に過激化していった。1970年以前，クルド人の基本的要求は，クルド諸地域における経済発展や，クルド語による読み書きなど基本的文化的権利の承認に関わるものであった。1970年代，クルド系組織は競うようにして急進的な要求を打ち出して，多くが分離主義へと傾いていった。かつてはクルド人の運動のもっとも緊密な同盟者であったトルコの左翼がクルド

[32] 二人のうちサイド・エルチは，［もう１人の］より左寄りのクルムズトプラクが司令部を置いていた村の近くで遺体となって発見された。クルムズトプラクは，その後，バールザーニーの手下によって捕らえられ，非公開の革命法廷で行われた非公開の裁判で死刑を宣告された。

人問題を避けるようになり，せいぜいのところ庇護者としてふるまうにとどまったことが，こうした動きに拍車をかけた。1975年から78年にかけては，中央政府が相対的に弱体化していたため，法律によるものではないが，実質的に，トルコ共和国史上最もリベラルな時代となり，クルド系組織が自由に組織化を進め，政治宣伝を行うことができた。小さな町にまで支部が開かれ，政治的パンフレットが読まれ，議論が交わされた。イデオロギー的な違い，とくに個人的敵対関係が組織の中に多くの亀裂を作り，70年代末までにおよそ10個の組織に分裂した。1976年から77年にイラク・クルディスタンで再びゲリラ闘争が始まると，トルコのクルド系組織の中にはイラクのクルド系組織と同盟し，兵站面でかなりの支援を行うものもあったが，トルコ・クルディスタンに精力を集中するものもあった。地域全体を掌握することで，同じ地域で活動するトルコ系またはクルド系組織とときに武力衝突する組織もあった。クルディスタン労働者党（クルド語での略称としてPKK）と名乗る組織が「反植民地」闘争の開始を宣言し，トルコ人の「植民者」やクルド人の「協力者」や「裏切り者」に向けて「革命的暴力」を行使した。「協力者」や「裏切り者」の範疇には，部族長，政治家，競合する諸組織の構成員も含まれた。奇妙なことに，かつて部族長たちが台頭した際の残忍なやり方を思い起こさせるような容赦ない暴力的手段によって，PKKはいくつかの地域を掌握した。

東部のみならず，トルコ中で，急進的な政治が極端に暴力的なものとなった。1978年12月には戒厳令が宣言されたが，このことは，主に労働組合や文化団体において合法的に活動していた組織に影響を与えた。弾圧にも拘わらず，地下活動は無傷で続いた。トルコ・クルディスタン全域で，組織は自らの政治宣伝を続けた。私のように1970年代末にクルド地域を旅した者には，クルド民族主義がかつてない支持を受けているように見えたが，競合する組織間の暴力的紛争のために治安が悪化する地域もあった。1980年９月12日，トルコ軍が権力を奪取し，クルド系組織の一掃を図った。大量の逮捕と軍事作戦でクルド系組織は激減した。分離主義への厳しい弾圧，

強制的同化，（あまりうまくいかなかったが）経済的てこ入れを組み合わせた一連の政策によって，軍政当局はクルド民族主義を根絶しようとしたのであった[33]。

## イラン・クルディスタンとイスラム革命

マハーバード共和国崩壊後，イランにおけるクルド人の運動は勢いを失った。クルド人の政治活動が完全に停止したわけではなかったが，かなり小規模なものに留まった。イラクとイランのクルド人が1945年にマハーバードで結成したクルディスタン民主党は，分裂した。イラク系党員のなかには，イラクに戻り，目立った活動は控えながらも党組織の一部を存続させるものもあった。1950年代のイラク・クルディスタン民主党は，マハーバードで結成された党の後継者と自認していたが，党員レヴェルでの連続性はほとんどなかったと思われる。イラン側の党員のなかにも密かに会合を開き続ける者もあった。彼らの支部は以後，イラクの姉妹政党やシリアにあった同名の党と区別するために，イランKDPと呼ばれるようになった。

1940年代末から1950年代初頭にかけ，イランKDPはイランの共産党，トゥーデ党と密接に協力した。実際，実質的にトゥーデ党のクルド部門となっていたほどであった。1950年代初頭のわずかな期間，イランで民主主義が高揚すると，トゥーデ党の指示に忠実に従いつつ，イランKDPが活動を復活させたが，クーデタによって民主主義の時期は突如として終わりを迎え，シャーが権力に復帰した。反体制派は弾圧され，潜在的反体制分子は一斉逮捕された。トゥーデ党組織のほとんどが追い詰められ，イランKDPも同様であった。党の最も重要な指導者たち数名が逮捕され，国外逃亡に成功した者の多くはイラクや東ヨーロッパへと向かった。幹部のう

[33] トルコ・クルディスタンでの動向については，別のところで詳細に論じた。Bruinessen 1982, 1984aを参照。

ちイラン・クルディスタンに留まったのは，ごくわずかだった。

1960年代，かなり控えめながら，新たな活動の時代がやってきた。いずれも，イラクにおけるクルド人の運動に直接関わっていた。1962年以降，イランKDPは，バールザーニーのペーシュメルガへの後方支援を準備し，彼らのための資金，食料，衣類をイランに住むクルド人から徴収した。当初，イランKDPのバールザーニーに対する忠誠はほとんど疑問の余地のないものであって，党は自らの政治活動よりイラクのクルド人の運動の利益を優先させた。1964年以降，バールザーニーがイランと密接な関係を築きはじめた際には，一部の党員，とりわけ若い党員たちは，バールザーニーから自立できないことやイラン・クルディスタンでの政治活動が停滞していることについて，考えを改めるようになった。このグループは，シャーからの援助を受けるためバールザーニーがイランKDPをイランでの政治闘争から意図的に遠ざけていると感じていたのである。

1967年，イラク・クルディスタンに暮らし，党の慎重路線に不満をもつようになっていたイランKDPの若手党員たちのグループが，イラン・クルディスタンに戻り，武装反乱の準備を進めた。彼らは経験が浅いうえに，チェ・ゲバラのゲリラ戦理論に強く影響を受けていた。イラン・クルディスタンでの革命の機が熟し，わずかなゲリラ部隊だけで革命を起こせると信じていたのである。彼らは，悲惨な挫折を迎えることになった。彼らが期待を寄せた農民たちが彼らの支援に立ち上がることはなかったのである。彼らは皆，１年もしないうちに軍の特殊部隊や治安部隊（農村警察部隊）に捕らえられ，殺害された。他の自称革命家への見せしめのため，彼らの遺体は町にさらされた。中には，バールザーニーのペーシュメルガの協力で追跡・逮捕された者もあったといわれる。実際にあったかどうか確証することは難しいが，そうした批判が，イランのクルド人の若い世代の間に強い反バールザーニー感情を長く抱かせる原因となった。その後，イラン革命を経て，この恨みはイラン系クルド人とバールザーニー支持者との間での度重なる衝突を惹起することになった。

この小さな反乱を鎮圧した効果は大きかった。その後，概ね10年間は，イラン・クルディスタンでは組織化された政治運動が展開されることはなかった。シャーの秘密警察（サーヴァーク）や治安部隊がこの地域を厳しい管理下に置いた。しかも，1970年代の好景気によって国家が人口の相当部分を取り込むことに成功し，不満は抑え込まれた。教員や公務員の給与はかなり上昇し，民間企業は好況に沸いた。シャーの「白色革命」は大地主の権力を破壊し，小自作農という新たな農村中間層を生み出した。土地を持たない農民たちは南部イランや湾岸諸国の石油産業に雇用を求めるか，大都市の建設作業員の群れに加わった。だが，1977年の不況で彼らの多くが突然職を失った。

1978年，政治抗議の波がイランを飲み込むと，シーア派都市の住民だけではなく，クルド系の都市や町の人々も大規模な街頭デモを組織した。表面的には静かだが，その下では強い政治的不満がたまっていたことが示された。実際，イラン･クルディスタンでの最初の抗議行動は，早くも1977年に起こった。いくつかの地域では，居座り続ける地主への小規模の抗議行動や土地の占拠があった。それらを組織したのは，左翼系地下運動，「労働者革命組織」，略称コマラ（「組織」）であった。1978年の政治デモは，シーア派諸都市でのデモにならったものであり，政治犯の釈放と政権交代といった同様の要求を訴えた。この地域出身の政治犯のほとんどがクルド民族主義者であったから，デモは暗黙のうちに民族主義の色彩を帯びるものとなった。デモを組織したのは，社会のさまざまな集団を代表する，臨時の委員会であった。それらは，特定の政治組織や傾向によって支配されておらず，マハーバードのエマーム・ジョムエ（金曜の集団礼拝の導師）であったイッザッディーン・フサイニーのような独自のカリスマ的指導者を生み出した。フサイニーはいかなる政治組織にも属していなかったが，宗教意識の強い若者からも，急進的左翼の若者からも支持を得た。

1978年夏，クルド人の政治犯，すなわち23年前に逮捕されたイランKDPの指導者たちが釈放された。他の党幹部も密かに亡命先から帰国し，マハー

バードを本部とする強固な党組織を立ち上げるべく奮闘した。同じことを，さらに南，サナンダジュやその周辺でコマラの指導者たちが試みた。ほかにも多くのクルド系組織が生まれたが，大半が左翼系で，イスラム系のものは一つか二つであった。革命が最高潮に達すると，警察，治安部隊，国軍部隊の多くがあっさりと持ち場を離れ，多くの基地が住民によって占拠された。多くの武器がクルド系組織の手に渡り，彼らは自らのペーシュメルガ部隊を編成した。

1979年２月，革命後初の政府が樹立されるや，首都テヘランでクルド人の代表と革命当局との間でクルディスタンの将来の地位をめぐる議論と交渉が始まった。さまざまな町や都市で開かれた一連の集会で，クルド人たちは，クルド系住民が居住する全域での自治を主たる要求とすることで合意に達していた。ただし，自治が具体的にどのような形をとるかに関しては，多様な案が存在した。当然のことながら，新しい中央当局は，国土全体に統治権を行使することを強く主張し，クルド人たちの思惑について強い不信感を抱いた。双方に複数の権力の中枢があって互いに対立していたことも，相互理解と信頼を阻んだ。中枢の一つが譲歩すると，即座に他の中枢から拒否や非難が浴びせられたからである。

以後数ヶ月，クルド人も中央当局も相互不信を強めた。あちこちでクルド人民族主義者とイスラム体制支持者が衝突し，ともに相手の挑発を非難した。革命委員会と革命防衛隊は，クルド地域では少数派のシーア派やクルド民族主義者と衝突する他のグループを支援した。当局が不信を抱いたのは，クルド人たちが自治を要求したからだけではなかった。イランKDPもコマラも，その綱領は明らかに世俗的なものであった。両組織は急速に影響力を拡大し，両者でイラン・クルディスタンの大半を支配するにいたった。両党は1979年３月のイスラム共和国樹立に関する国民投票への参加を拒否し，その結果，クルディスタンではほとんど誰一人として投票する者はなかった。くわえて，イランKDPは，イランの聖職者たちが「小悪魔」と見なしたバグダード政府［イラク政府］と長年にわたって関係をもって

いた。

イランの左翼系反体制派の多くはクルディスタンに拠点をおいており，イランの他の地域で激しい攻撃にさらされるなか，クルディスタンは彼らにとってはいっそう重要な基地となっていた。もっとも嫌悪されていた将軍たちの一部も含む，シャーに忠実な個人やグループはイラクに逃げ，国境の向こう側にあって脅威となっていた。こうしたグループがイランに侵入し破壊活動をしたとの報道もあった。テヘランからみると，イスラム体制の敵はみなイラン･クルディスタン内部かそのすぐ後ろに集結していたというわけである。1979年８月，国境の町でのささいな事件がクルド人に対する最初の軍事攻撃の口実となった。国軍と革命防衛隊が都市や町を占領し，最初の戦闘で数百人を殺害した。他方で，多くの者が略式の革命「裁判」を経て処刑された。武装したクルド人数千人が山に入り，国軍や革命防衛隊をゲリラ戦へと巻き込んでいった。数ヶ月後，政府はクルド人指導者たちとの間で停戦と交渉に合意した。国軍や革命防衛隊も残留していたが，町の多くはその後再びクルド人の管理下に置かれた。

1980年３月，イランは革命後初の選挙を実施した。クルディスタンでは一部地域での実施にとどまったが，結果はイランKDPが圧倒的支持を得ていることを示した。イランKDPは中央の政治機構に自らの意見を反映させることに関心をもっていたが，この政治的勝利も効果はなかった。翌月，政府は新たにクルディスタンに対する攻撃を開始し，イランKDP指導者アブドッラフマーン・ガーセムルーは，選挙で大勝利を挙げたにも拘わらず，ペルソナ･ノン･グラータ（好ましからざる人物）と宣告された。不安定ながら停戦がなった1980年夏，私がマハーバードに入ったとき，町はイランKDPの管理下にあったが，国軍部隊によって包囲されていた。

[34] このグループは，その年に開かれた党大会にちなんで「第４大会」グループと名乗った。主な指導者は，23年間を監獄で過ごしたガーニー･ボルーリヤーンやイラクに亡命していたキャリーム･フサーミーであった。彼らは，自分たちこそが唯一の正当な党指導部であると考えていた。事実上，彼らが所属していたトゥーデ党同様，ホメイニーが反帝国主義を代表し，聖職者集団と戦術的に同盟を結ぶことでより多くのものが得られると期待していたのである。彼らはまた，ガーセムルーがイラクと関係をもっていたのを厳しく批判した。

この間，イランKDP内部で分裂が生じていた。トゥーデ党路線に忠実であった古い世代の指導者の中には，ホメイニーとの妥協を望み，ガーセムルーや若い世代の対決路線に反対した者もあったのである。彼らは党を割ったが，それに追従したのはほんのわずかであった[34]。より広く大衆の支持を得ていたガーセムルーらは，その間，政府軍の新しい攻撃に備えていた。実際，攻撃はその年の夏に起こった。クルド人たちの内紛は，イランKDPの分裂にとどまらなかった。コマラとイランKDPとの関係もけっして友好的であるとは言いがたく，主導権をめぐって争っていたいくつかの地域で両組織のペーシュメルガが衝突した。しかも，両者ともにバールザーニー派のクルド人との関係はすこぶる悪かった。バールザーニー派がイラン政府にかなりの程度依存し，多かれ少なかれ同盟関係にあったからである。

イランには，なお数万人のイラク系クルド人難民が暮らしていた。難民キャンプやテヘラン近郊のキャラジュ，イラクやトルコ国境に近いいくつかの町や村に暮らす者のほか，全国各地にも散らばっていた。かつてのシャーとの関係にも拘わらず，まもなくしてKDP臨時司令部の指導者たちは，新たなイスラム体制と友好関係を築くのに成功した。両者ともに，共通の敵イラクに対する当然の同盟相手であることを知っていたのである。さらに，KDP臨時司令部にとって，難民たちが実質的に人質になっている状況ではイラン政府を敵に回すことは許されなかった。かくて，イラン政府とイランのクルド人との紛争においてどちらにつくべきかというやっかいな立場に置かれていたのである。

加えて，イランKDPとコマラは，バグダードと接触していることが知られていた。そして，上述のように，1967年から68年に活動家たちが捕らえられて殺害された際にバールザーニー派が関与したともいわれていたために，イランの若いクルド人の中には，彼らに対して敵意を抱く者も多かった。ムッラー・ムスタファー・バールザーニー自身は1979年初めにアメリカで死亡し，彼の遺体はイランに空輸されて，多くのイラク系クルド人が

暮らすイラン･クルディスタンの町，オシュノヴィーイェに葬られた。彼の墓はイラク系クルド人の参詣地となったが，後には冒瀆された。誰の仕業か明らかになることはなかったが，事件のせいでバールザーニー派とイランのクルド人との紛争はさらに悪化した。イラン＝イラク戦争が勃発したとき，敵対する国同士が相手のクルド人を利用しようとするかつてのパターンが繰り返されることになった[35]。

## イラン＝イラク戦争とクルド人

1980年９月，イラクがイランを攻撃した。すばやい攻撃でイスラム体制を崩壊させられると信じていたのは明らかだ。表向きの開戦の口実はイラク南部で多数派を占めるシーア派を対象とするイランの革命プロパガンダであったが，イラク自身，領土拡大の野心をもっていた。すでにイラクの最高指導者としての地位を確立していたサッダーム・フセインは，シャットルアラブ川の完全掌握を放棄せねばならなかったことに憤懣を募らせていた。アルジェ協定を破棄し，また，豊かな油田がありアラブ系住民が暮らす［イラン南部の］フーゼスタン州（イラクではアラビスタンと呼ばれていた）を「解放」することも狙っていた。だが，イラクによるイラン侵攻は，まったくの誤算だった。フーゼスタン州のアラブ人もイランのクルド人もサッダームを支持して集まることはなく，攻撃は，イラン人が政府の周りに結集するのに役立っただけであった。イランの反撃が南部戦線でも始まったが，その後数年間は，大規模な攻撃は北方でも行われた。３つの主要戦闘地域は，クルディスタンに位置していた。

イラクによる攻撃後まもなく，イランKDPはイランへの基本的忠誠を表明し，以下の和解案を提案した。それは，イラン軍に対し，侵入するイラク軍と戦うための行動の自由を認めるというものであった。イラン当局

[35] 革命直後の１年におこった諸事件についてのより詳細な概観については，Bruinessen 1981, 1983やTilgner 1983を参照のこと。

はこれを拒否し，イラン＝イラク戦争を通じて，イラン軍はイランのクルド人との戦闘を継続した。イランKDPとコマラは，イラクからの後方補給や財政その他の支援にますます依存するようになったが，イラク軍と軍事的に協力することはなかった。他方で，イランは，イラクKDP（すでにその名称から「臨時司令部」を投げ捨てていた）への支援を拡大していった。ターラバーニーのPUKと新たな政治組織クルディスタン社会主義党（KSP，マフムード・オスマーンの党がPUKから分離した一派と合流して結成）は，最初の数年間，いずれにもつくことなく両政府と交渉するという微妙なバランスを維持した。実際の犠牲者は，国境の両側にいた一般住民であった。彼らは，自国政府による激しい対ゲリラ作戦と，国境の向こう側からの爆撃や砲撃に耐えねばならなかった。

イランKDPもコマラもなお，クルド地域の大部分を支配していた。山岳地帯でのゲリラ戦に慣れていない政府軍だけで彼らを打ち負かすのは不可能であった。経験豊かなゲリラ勢力をもつイラクKDPが次第に重要な役割を演じるようになった。どの程度彼らがイランのクルド人に対する戦闘に参加することを強いられたのか，あるいは自主的に参加したのかはわからない。イラクKDPが，姉妹政党のイランKDPとバグダードとの接触を強く疑っていたのは間違いなく，他方で，コマラはバールザーニー派に対する敵意を繰り返し表明した。1983年，イラクKDPとイラン軍は共同で，イラン領内最後の「解放区」からイランのクルド人を排除するのに成功した。それ以来，イランKDPもコマラも司令部や軍事基地をイラク・クルディスタンの強制退去地域においた。それぞれのペーシュメルガは作戦を続行し，ときにはイラン領内深くにまで入り込むことに成功した。

1970年代にイラクが強制的に住民を退去させた国境沿いの立ち入り禁止区域は，イラクとイランの両方の反体制派が作戦を展開する際の基地となった。スライマーニーヤの北，フリネウゼングあるいはナウゼングにある渓谷は，「政党の谷」として知られるようになった。1978年以来，PUKとイラク共産党がそこに司令部を置いた。クルディスタン社会主義党も，

1979年に創設された時点では，そこに司令部を構え，いくつかのイランの小規模左翼集団が合流した。イランによる最初の攻撃の際，イランのクルド人の部隊は，一時的にその区域に撤退し，1983年からはフリネウゼングから遠くない地域に司令部を置いた。イラン最大の反体制武装集団「人民のムジャーヒディーン」もこの地域に主要基地を設置した。イラクKDPは，当面，トルコ国境に近いバーディナーンにある自らの伝統的影響圏に精力を集中した。

ターラバーニーのPUKとバールザーニー派との年来の敵対関係は，消滅するのに時間がかかった。さまざまな党や人物が和解させようとしたが，せいぜい，一時的にしかうまくいかなかった。互いの猜疑心はあまりに強かったのだ。ときに，それぞれの司令部から離れたところで活動していた両党のペーシュメルガ部隊が衝突することもあった。1980年代半ばまで，両党の拠点の間にある地域の支配をめぐり激しく争った。それゆえ，イランKDPとPUKが，古くからの互いの猜疑心にも拘わらず，戦術上の同盟を組んだのは驚くにあたらない。1982年から1983年の間，イランKDPは，イラクKDPのペーシュメルガとイラン軍の攻撃にさらされており，PUKはみずからの部隊の一部を［イランKDPの］支援に派遣した。他方で，イランKDPは，PUKとバグダード政府との間の交渉において仲介をおこなった。交渉は，1984年に始まってから１年以上にわたり膠着状態となった。

これらの組織だけが，この地域で活動するクルド系部隊というわけではなかった。クルド人反体制派と戦わせるために両国の中央政府によって武器を与えられた多くのクルド系民兵部隊もあった。これらの部隊は他のクルド人たちから「ジャーシュ（ロバの子）」と軽蔑的に呼ばれていた。イラクでは，もっぱら大きな部族から徴募され，みずからの族長のもとに軍事作戦に従事した。イランでは，公式には「ムスリムのペーシュメルガ」と呼ばれ，部族単位の部隊もあったが，多くは明らかに無産階級の農民から徴募されていた。彼らは地形を熟知し，山岳部でのゲリラ戦に長けていたから，反体制派のクルド人から正規軍以上に恐れられた。部族単位の

ジャーシュは政治的な動機をもたず，過去に政府と反乱軍との間で何度も寝返った者もあった。時には彼らとペーシュメルガとの間に互いを避けるという暗黙の了解がある場合もあったが，激しく衝突する場合もあった。

イランが国内にいるイラク系クルド人難民の間にイスラム政党を作って武器を与えたことが，事態をさらに錯綜させた。イラクKDPとイラン政府との関係は良好であったが，イラクKDPは世俗組織であり，イラク共産党と協力していた。イランはイデオロギー的に近い政治組織を現地に作ることを望んだのだ。これらのイスラム政党は，しばしば親イラン・メディアで取り上げられるものの，クルディスタン自体では，シャイフ・ムハンマド・ハーリド・バールザーニーの「クルドのヒズブッラー（神の党）」をのぞいては，たいして影響力をもつことはなかった。1974年以来難民としてイランに住んでいたシャイフ・ハーリドは，カリスマ的なシャイフ・アフマド・バールザーニーの後継者としてバールザーンの現職のシャイフであった。そのため，彼は多くの献身的支持者の忠誠心に訴えることができた。彼はイドリース・バールザーニーやマスウード・バールザーニーの実のいとこでもあったが，イランに来てからは彼らの政治活動から距離を置いていた。1985年，彼はイラン政府に武器を与えられた忠実な支持者たち多数を引き連れてイラク・クルディスタンに入った。とはいえ，その後，この「クルドのヒズブッラー」についてはたいした話は聞こえてこなかった。

クルディスタンにあったイラクのさまざまな反体制派勢力や，南部のシーア派グループ（あるいはむしろ，イランに亡命しているシーア派指導者たち）の間でさえも，さまざまな組み合わせによる共同戦線結成が何度か試みられた。しかし，たいていの場合，政党間の関係は不安定であった。イラクKDPとPUKは和解不能のようであった。しばらくは，二つの同じような戦線が併存した。一方は，PUKと，イラクKDPを離れた多くの組織からなり，もう一方は，イラクKDPと，PUKから離れた組織からなっていた。結果的には，いずれもそれほど有効ではなかった。イラク軍がイ

ランとの戦線に集中し，そのためにクルディスタンでのプレゼンスを低下させた1980年代半ばまでに，イラクKDPととりわけPUKが，小規模組織を犠牲にしながら支配地域を拡大した。両者の衝突は増大した。PUKとイラン政府との関係は最悪の状態に陥り，一度に二つの軍隊と戦うことのできないPUKは，バグダードとの合意にむけて交渉していた。PUKと競合する諸勢力は，1966年の事件が繰り返され，この合意の条件としてPUKが他のクルド系組織と戦うことを余儀なくされるのではと懸念していた。しかし，交渉は決裂し，1986年にテヘランでPUKとイラクKDPは共同記者会見を開いて，両者が今後は協力すると宣言して周囲を驚かせた。和解がイランの画策によるものであったことは明らかだ。多くの観測筋の予想とは裏腹に，和解は持続的なものとなった。両党はさらなる内部抗争を避け，共同軍事作戦さえ展開した。ときおり表面化するわずかな不一致にも拘わらず，以来，イラクのクルド系政党は連携を維持したのである。

イランのクルド人の状況も，同様に複雑であった。そこでは，イランKDPとコマラだけが重要な組織だったが，二つのうち前者が優勢であることは明らかだった。1983年末まで，イラクKDPがイラン・クルディスタンの北部に手強い存在として居座り，政府軍によるイランのクルド人に対する作戦のいくつかに加わった。しかし，その後数年間，イラクKDPは，イラクにおける活動に精力をほぼ集中させた。革命期に活動していた左翼系やイスラム系の小規模クルド組織は，1980年代初頭までには事実上消滅していた。イランKDPもコマラも非クルド系反体制派と連携し，前者は人民のムジャーヒディーンと，後者はいくつかの小さな左翼組織（毛沢東派）と手を組んだ。

1981年半ばまでに，人民のムジャーヒディーンは革命政権中枢で権力の分け前に与ることができず，反体制ゲリラ闘争を展開していた。指導者マスウード・ラジャヴィーはバニー・サドル大統領とともに国を去った。亡命先のフランスで，彼らはイランKDP（バニー・サドルは大統領在任中，イランKDPと激しく対立していたが）と接触し，共同で国民抵抗会議を

創設して，ホメイニー体制の打倒そのものをめざした。人民のムジャーヒディーンは，1980年以来，クルディスタンに一定の勢力をもっていたが，党員のほとんどはクルド人ではなく，シーア派組織であることは明確であった。1980年代初頭，彼らはイラク・クルディスタンの強制退去地域に軍事基地を設けた。彼らは，イランKDP以上にバグダード政府と密接な関係を築き，依存していくことになるのであった。数年後，イランKDPと人民のムジャーヒディーンとの関係はかなり冷却化した。イスラム体制が居座ることに気づいたイランKDPは妥協的な態度をとり，綱領から世俗体制への要求を削除し，ホメイニー打倒への呼びかけよりも，現体制と和解を望んでいることを示した。他方，人民のムジャーヒディーンは，徹底して反体制派であり続けた。

コマラは，1983年に３つの小さなイラン系組織とともにイラン共産党を組織するために誕生した。イラン共産党というまさにその名称が，交渉によるイスラム体制との和解が論外であることを示していた。コマラは，イランKDPの軟弱な態度をクルド人の運動への裏切りと見なした。イランKDPをブルジョワ＝封建組織と宣言し，イランKDPに対する階級闘争を呼びかけた。しかも，コマラによれば封建的な裏切り者集団のイラクKDPが支援するイラン軍の越境攻撃によって，イランKDPとコマラが押されている最中のことであった。実際には，コマラとイランKDPとの「イデオロギー的」争いは，おそらく支配領域にかかわるものであった。イランKDPがかつてコマラの拠点であった地域での軍事活動を活発化させ，クルディスタンにおいて無視できない唯一の勢力となることを望んでいたのは明らかである。それによって，交渉での立場を有利にできるからであった。次第に弱体化・孤立化したコマラは急速に過激化し，みずからを世界革命の前衛と見るようになっていった。党は1980年代後半に分裂し，指導者の多くが欧州諸国に亡命した。

政府と妥協しようというイランKDPの方針も，それほどうまくいかなかった。ゲリラ活動は数の上では減少したが，時にイラン領内深部への襲

撃も行われた。党がなお存在し，どこであれ襲撃できること，また，政府が和解を拒否する限りクルディスタンを完全に支配することはできないことを見せつけるためであった。ラフサンジャーニーが確固たる地位を確立していたイラン政府は，イラン＝イラク戦争集結までに，ようやく真剣に交渉する意志を示すようになったようだった。このとき，PUKが仲介役を果たし，国外での第１回ハイレベル交渉を準備した。1989年，イランKDPはウィーンでの第２回交渉に招かれたが，このときPUKは不参加であった。罠であった。ガーセムルーと二人のクルド人の代表が，交渉のテーブルについているところを射殺された[36]。暗殺はイランKDPを混乱に陥れた。というのも，ガーセムルーはそのもっとも卓越したカリスマ的指導者であっただけでなく，重要な思想家であり，戦略家であり，外交官であり，組織者であったからだ。こうして党が１人の人物に依存していたことは，党の大きな弱点であったし，次席の指導者たちの一部に一定の不満を生み出す原因でもあり，1988年初頭の党分裂につながった。党の両派はなお1991年初頭まではイラク・クルディスタンに司令部をもっていたが，その立場はきわめて微妙で，明確な戦略は一切もっていないようであった[37]。

## サッダーム・フセインによるクルド人問題の解決

イラン＝イラク戦争の最初の数年間，イラクは軍事活動をイランに集中させた。クルディスタンの戦略的な地域からの強制退去は，開発計画と同様に中断され，クルディスタンに対する軍事支配は弱まった。イラク

[36] まもなくして二つの主要な反体制組織コマラとムジャーヒディーンの指導者たちもまたヨーロッパで暗殺された。ある観測筋によれば，これらの暗殺はイラン指導部内の派閥抗争に由来し，ラフサンジャーニーを混乱させ，いかなる形の国民和解をも妨害しようとする「急進派」の仕業とされている。この説は必ずしも説得的ではない。ガーセムルー事件では，ラフサンジャーニー本人に近い人物が関わっていたことを示す証拠があるからである。

[37] イラン＝イラク戦争がクルド人に与えた影響のさまざまな側面は，以下の文献で論じられている。Entessar 1984, Bruinessen 1986, Malek 1989. 革命後のイランとイラン＝イラク戦争に関するディリップ・ヒロの優れた著作（Hiro1987, 1989）は，ここで概観した諸事件の背景に関する必須文献である。

KDP，PUK，SPK（クルディスタン社会主義党）といったクルド系ゲリラ運動は，イランやシリアの支援を受けて強化され，より自由に作戦を展開し「解放区」を作ることができた。トルコ国境に近い北部では村人たちが強制退去地域に帰還し，ペーシュメルガの保護のもとに生活することさえあった。ペーシュメルガはイラン軍との連携を強化しながら軍事行動を展開していった。イラク政府は民間人に対する激しい報復を行い，クルディスタンでの軍事作戦を拡大して，住民の強制退去を再開した。

1987年初頭，サッダーム・フセインのいとこアリー・ハサン・アル・マジードがバース党北部問題局局長に任じられたのが，重大な転機となった。アル・マジードは，後に「クウェートの屠殺者」として知られるようになる人物であった。彼は他のすべての文民・軍人当局を圧倒するほどの絶対的権限を与えられた。アル・マジードは，1989年までにさらに国境から30キロまでに強制退去対象地域を拡大し，その域外にあった多数の村も破壊した。彼の指揮の下，正規軍旅団と精鋭の共和国防衛隊からなるイラク軍は，「アンファール（戦利品）」という不気味な名をつけられた３度にわたる残忍な攻撃を実行した。1988年初頭に始まった最初の２回の攻撃は，クルド人ゲリラを壊滅させ，民間人を山岳部の村の多くから排除するという二つの目的をもっていた。クルド側の情報によれば，これら3回の作戦で化学兵器が使用されたという。およそ１万５千の村が沙漠のキャンプに移され，そこで多くの者が亡くなったという。この攻撃は，クルド側が国連に訴えたにも拘わらず，国外では驚くほどわずかな関心しか引かなかった。

結局，1988年３月のハラブジャの虐殺があって，ようやくイラクによるクルド人弾圧が国際的関心を呼んだ。ハラブジャは，スライマーニーヤの南東，イラン国境に近い小さなクルド人の町であった。イラクのクルド人ペーシュメルガに支援されたイラン軍が春の攻撃でハラブジャ占領に成功していた。イラクは町への化学兵器投下で報復し，数千人のクルド人一般市民を殺害した。イランによってハラブジャへ招かれた外国人ジャーナリストによる衝撃的な映像や報告がついには国際的な非難を招いたが，クル

ド人のためにイラクに効果的な圧力をかけるにはいたらなかった。半年もしないうちに，イラクは再びクルド人一般市民に化学兵器を使用し，以来，このテロ兵器の脅威を効果的に利用するようになった。イランとの停戦が署名されてまもなく，３回目の，しかももっとも残忍なアンファール攻撃が1988年８月に行われた。イラクの最北部，イラクKDP支配下の地域に向けられたものであった。毒ガスを使った攻撃で数千人が殺され，生き残った者たちは恐慌を来して逃げまどった。イラク軍が国境を封鎖するまでに，およそ６万５千人がトルコへと国境を越えた。イランに逃げた者についてはその数は不明である。

化学兵器の恐怖を拡散し，クルド人に対して使用するのをためらわないと示したことで，イラク政府はクルディスタンを実質的に制圧した。イラクのクルド系政党はイラク国内での武装闘争放棄を鮮明にし，国外での政治的・外交的努力に集中したが，さしたる成果は得られなかった。その間もイラク・クルディスタンの広い地域で強制退去が続いていた。1990年末までに，イラクにある推定７千のクルド人の村のうち，４千ほどの村が破壊されたと言われる。ハラブジャやラニヤなどの町でさえ跡形もなく破壊され，住民は国境から離れたところに作られた「ニュー・サッダーム・タウン」に定住させられた。およそ３万人のイラクのクルド人がなおトルコの難民キャンプに留まっており[38]，その数倍がイランに住んでいた。

1990年のクウェート危機の間，政府はクルド人に対し，おとなしくしていないとハラブジャよりも何倍もひどい目にあうことになると警告した。この脅迫が有効であることは確かであった。クウェート危機とその後の湾岸戦争を通じて，クルド系組織は一部の武装した者をイラク国内に送り込んでいたが，軍事活動はひかえていた。クウェートでのイラクの敗北はサッダーム体制が倒れることへの期待を抱かせた。1991年３月，イラクの

[38] 当初トルコにやってきた６万５千のイラク人難民のうち，ごくわずかな者がトルコの圧力もあってイラクへと帰還した。はるかに多くの者たちは，トルコを去って第３国に向かった。数万人がイランに行き，そこではクルド人難民はトルコよりもよい待遇を受けた。トルコはきわめて冷淡であった。

クルド人はかつてないほどの規模の蜂起に立ち上がった。このとき主導権を握ったのはクルド系政党ではなく，長らく表立った政治から距離をおいてきた，あるいはバース党政権と協力さえしていた都市在住の多くのクルド人たちであった。蜂起に対して，クルド系組織が一定の指導権を握るのは，後のことである。数週間は，解放感が広がっていた。クルド人たちは北部にある政府機関を解体し，イラク兵はクルド人に降伏するか，ただ故郷へと帰って行った。しかし，そのとき突然，サッダームの軍事力が期待されたほどには戦争で破壊されていなかったことが，いやというほど明らかとなった。蜂起した町にイラクの戦車や武装ヘリコプターが襲いかかった。リン酸や硫酸を含んだ爆撃やイラクの恐るべき化学兵器への恐怖がクルド人の多くを混乱させ，数十万もの人々が恐慌を来して山岳部やトルコあるいはイラン国境へと向かった。イラクのクルド人の半分かそれ以上にあたる200万以上の人が故郷を離れた。

サッダーム・フセインは，まさに文字通りの意味で，隣国にイラクのクルド人問題を輸出することにほぼ成功した。多数の難民による経済的負担と治安悪化の可能性により，自国のクルド人問題が悪化するおそれがあるとしてこれらの国々が警戒したのももっともであった。トルコは，数千のイラクのトルコマン人の入国は認めたが，全部で50万ほどの他の難民については，きわめて過酷な状況の下，国境に待機させた。およそ3倍の難民がイラン国境にやってきたが，トルコとは違い，イランは彼らをすべて受け入れた。ただし，十分な救援を提供できないことが判明した。西側の国際世論に押されて，アメリカはトルコ＝イラク国境で大規模な救援作戦を展開し，その後，イラク北部で「人道的介入」を実施した。アメリカ軍は，他のNATO諸国の部隊とともに，ザーホーやアマーディーヤの渓谷といった北部イラクの回廊を占領し，トルコ国境の難民はそこまで戻ることが期待された。多国籍軍はきわめて短期間のうちに撤退し，この安全地帯を国連監視団に引き渡すと主張した。しかし，クルド人たちは自分たちの安全にとってこれが十分な保障にならないだろうと指摘した。多国籍軍の救援

活動はトルコ国境の難民に集中し，イランにいるはるかに多数の難民にはわずかな救援しかなされていない。このことは，多国籍軍の介入の隠れた目的が，トルコを難民問題から解放することであったことを示している。イランに逃げたクルド人を対象にイラクに「避難地域」を創設することはいっさい試みられなかった。

すべての主要な政党のクルド人指導者たちは，サッダーム・フセインが湾岸戦争を生き延びたのみならず，もはや多国籍軍が彼の打倒を望んでいないと考え，1991年４月にバース党政権と交渉をはじめた。イラク政府はクルド人に対し重要な譲歩を行ったとも言われるが，かつてそうだったように，どの程度，またどれくらいの間，こうした譲歩が実行に移されるかは，予断を許さない。難民たちは大挙してイラクに帰還しつつあるが，彼らの多くはもはや戻るべき家をもたない。クルド系組織は，安全に対する十分な保障はないものの，彼らの帰還を望んでいる。というのも，故郷をもたない離散民族となるのは，はるかに大きな危険であると考えるからである。しかし，たとえ，すべてのイラク人難民が戻っても，イラク・クルディスタンの問題はイラクにのみ関わる問題ではけっしてないだろう。多国籍軍が関与をやめることはできないだろうし，とりわけトルコはいまやこれまで以上に深く関与しているのだ。

## トルコにおける最近の変化

1980年代初め，クルド人問題はもとより，クルド人の存在そのものがトルコでは激しく否定されていたが，1980年代終わりまでにクルド人問題はもっとも熱心に議論される政治問題となった。1991年３月のイラクにおけるクルド人蜂起の最中，トルコ大統領トゥルグト・オザルはイラクのクルド人指導者を半ば公式の会談に招くという前例のない行動に出た。彼は，イラクにおいては連邦制が最善の解決策であると提案し，こうした解決策がトルコでも可能かもしれないとほのめかした。彼がクルド語の使用禁止

を解き，クルド人による出版物への検閲を軽減してからまもなくのことであった。

西欧による圧力と，ヨーロッパ共同体の正式加盟国として承認されたいというトルコ側の希望が，こうした態度の変化をもたらした一因であったことは，疑いのないところである。しかしながら，相当な危険を覚悟してクルド人問題に関心を向け，公式イデオロギーを批判し続けたクルド系，トルコ系のジャーナリスト，弁護士，政治家たちの努力に，より大きな功績が認められてしかるべきである。彼らは，トルコの政治言説に重要な変化をもたらした。しかし，こうした変化の背後にある主な要因は，PKKが展開したゲリラ活動であり，それが，トルコ当局に，クルド人問題が存在することを徐々に認めさせることになったのである。PKKを根絶しようとする試みはすべて失敗に帰した。過去数年の間に，党は急速に人気を高めた。クルド人問題に対する政府の最近の「柔軟」姿勢は，少なくとも部分的には，PKKがさらに人気を高め，影響力を増すのを防ぎたいという意図によるものであろう。

PKKは，1980年以前にすでに暴力活動に関与し，1980年代にはトルコ政府の役人やクルド人の「協力者」，競合する政治組織やみずからのメンバー内の離反者を襲撃し，クルド系組織の中でももっとも暴力的というイメージに忠実であった（Bruinessen 1988を参照）。1984年以降，トルコ国内深くにまで襲撃を仕掛けて，次第に範囲を広げながらゲリラ戦を戦ってきた。国軍はPKKに対してさして有効ではないことが判明し，政府はクルド人の部族民に武器をもたせて反乱軍と戦わせるという旧来の手法に訴えた（いわゆる「村落防衛隊」）。村落防衛隊や，ゲリラと戦うために創設された特殊部隊は，地方において恒常的な恐怖と抑圧の体制を作り上げた。PKKはみずからの側につくのを拒む者には暴力を加えた。当初，村落防衛隊の妻子にまで向けられていたPKKの暴力の残忍さは，厳しく批判されたが，次第にPKKはその勇敢さ故に不承不承ながらではあれ賞賛を勝ち取った。結局，国軍に対抗しうる，実質的に唯一の組織となった。国軍

は，ついにPKKを殲滅したと繰り返し宣言したが，そのたびに，PKKは数日のうちにあらたな派手な攻撃で応えた。多くのPKK活動家が殺されたが，党が新しいメンバーを徴募するのに苦労することはなかったのは明らかだ。当局は，これは単に山賊の問題ではなく，現実的なゲリラ戦であることを認めざるを得なかった。

ゲリラと軍による抑圧のため，トルコ・クルディスタンの大部分で生活の安定は失われ，トルコ西部への大規模な移住をもたらした。イスタンブル，イズミル，アンカラが，いまではトルコにおけるクルド人の最も多く住む都市となっている。そこでのクルド人の存在は，地方政治に顕著な影響を与えており，それは地方選挙で最も明白となる。この単純な人口動態上の事実が，これ以上クルド人の存在を無視することを不可能にした。さまざまな政治家たちがクルド人にはっきりと言及し始め，さらには，彼らの文化を抑圧するのを批判するようになった。とはいえ，実際にはあまり変わっていない。クルド語の歌を歌ったり，クルド人の歴史について書いたりすれば，いまなお訴追される。［クルド語の］雑誌や本は禁止され，拘留者はなお日課のごとく拷問を受け，拘留中の不可解な死は後を絶たない。しかし，1980年代末，トルコの政治言説は劇的に変化した。1980年のクーデタによって軍がケマリズムを復権させようとしたが，このイデオロギーはいまや社会全体によって拒否されていることがいっそう鮮明となった。このことがそのままクルド人にさらなる文化的・政治的権利が与えられたことを意味するわけではないが，こうした権利はいまや合法的に要求しうることを意味している。クルド人問題について語り，それがどういった要素から構成されるのか定義することが可能となったのである。今後10年の間にトルコのクルド人たちが問題解決の主導権を握ることはあり得ないことではないのである。

## 参考文献一覧

Adamson, David (1964), *The Kurdish War*. London: Allen & Unwin.

Anschütz, Helga (1984), *Die syrischen Christen vom Tur 'Abdin*. Würzburg: Augustinus Verlag.

Arfa, Hasan (1966), *The Kurds. An Historical and Political Study*. London: Oxford University Press.

Badger, George Percy (1852), *The Nestorians and their Rituals, with the Narrative of a Mission to Mesopotamia and Coordistan in 1842-1844 and a Late Visit to Those Countries in 1850*. 2 vols. London: Joseph Masters.

Benedictsen, Age Meyer and Arthur Christensen (1921), *Les dialectes d'Awroman et de Pawä*. København.

Beşikçi, İsmail (1969a), *Doğuda değişim ve yapısal sorunlar (Göçebe Alikan aşireti)*, Ankara: Doğan Yayınevi.

_____ (1977), *Kürtlerin 'Mecburi iskân'ı*. Ankara: Komal.

Bruinessen, Martin van (1981), "Nationalismus und religiöser Konflikt: Der kurdische Widerstand im Iran," in *Religion und Politik im Iran (= Mardom nameh. Jahrbuch zur Geschichte und Gesellschaft des Mittleren Orients)*. Frankfurt am Main: Syndikat: 372–409.

_____ (1982), "Koerden en Koerdisch nationalisme in Turkije," in *Turkije in crisis: Een sociale, politieke en economische analyse*, by M. van Bruinessen, R. Koopmans, W. Smit and L. van Velzen. Bussum/Antwerpen: Wereldvenster: 195–219.

_____ (1983), "Kurdish tribes and the state of Iran: The case of Simko's Revolt', in *The Conflict of Tribe and State in Iran and Afghanistan*, ed. by Richard Tapper. London: Croom Helm: 364-400.

_____ (1984), "The Kurds in Turkey," *MERIP Reports* 121 (February) : 6-12.

_____ (1986), "The Kurds between Iran and Iraq," *Middle East Report* 141: 14-27.

_____ (1988), "Between guerrilla war and political murder: The Workers' Party of Kurdistan," *Middle East Report* 153: 40-46.

Bumke, Peter J. (1979), "Kizilbash-Kurden in Dersim (Tunceli,Turkei) : Marginalität und Häresie," *Anthropos* 74: 530-548.

Bynon, Theodora (1979), "The ergative construction in Kurdish," *Bulletin of the School of Asian and African Studies* 42: 211-224.

Chaliand, Gérard (ed.) (1978), *Les Kurdes et le Kurdistan*. Paris: Maspéro.

Dam, Nikolaos van (1979), *The Struggle for Power in Syria*. London: Croom Helm.

Dann, Uriel (1969), *Irak under Kassem*. New York: Praeger.

Drower, Ethel Stefana (1941), *Peacock Angel*. London: Murray.

Dziegiel, Leszek (1981), *Rural community of contemporary Iraqi Kurdistan facing modernization*. (Studia i Materialy [Kraków], Nr. 7.) Krakow: Institute of Tropical and Subtropical Agriculture and Forestry, Agricultural Academy in Krakow.

Eagleton, William (1963), *The Kurdish Republic of 1946*. London: Oxford University Press.

Edmonds, Cecil John (1957), *Kurds, Turks, and Arabs*. London: Oxford University Press.

_____ (1967), *A Pilgrimage to Lalish*. London: Luzac.

_____ (1969), "The beliefs and practices of the Ahl-i Haqq of Iraq," *Iran* 7: 89-106

Entessar, Nader (1984), "The Kurds inpost-revolutionary Itan and Iraq,"

*Third World Quarterly*, vol. 6: 911–933.

Field, Henry (1940), "The Anthropology of Iraq, Part I, Number 1. The Upper Euphrates," *Publications of the Field Museum of Natural History. Anthropological Series* 30 (1940) : 1-224.

Furlani, Giuseppe (1940), *The Religion of the Yezidis. Religious Texts of the Yezidis*. Bombay.

Ghareeb, Edmund (1981), *The Kurdish Question in Iraq*. Syracuse, NY: Syracuse University Press.

Hajj, Aziz el (1977), *L'Irak nouveau et le problime kurde*. Essai politique. Paris: Khayat.

Hiro, Dilip (1987), *Iran under the Ayatollahs*, London and New York: Routledge & Kegan Paul, 2nd edition.

_____ (1989), *The Longest War: The Iran-Iraq Military Conflict*. London: Grafton Books.

Hütteroth, Wolf Dieter (1959), *Bergnomaden und Yaylabauern im mittleren kurdischen Taurus*, dissertation, Marburg.

Ibrahim, Ferhad (1983), *Die kurdische Nationalbewegung im Irak. Fine Fallstudie zur Problematik ethnischer Konflikte in der Dritten Welt*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.

Ivanow, Wladimir (1953), *The Truth-Worshippers of Kurdistan*. Leiden: Brill.

Jawad, Saad (1981), *Iraq and the Kurdish Question, 1958–1970*. London: Ithaca Press.

Jwaideh, Wadie (1960), "The Kurdish Nationalist Movement: its Origins and Development," Ph.D. diss., Syracuse University.

Kinnane, Derk (1964), *The Kurds and Kurdistan*. London: Oxford University Press.

Kutschera, Chris (1979), *Le mouvement national kurde*. Paris:

Flammarion

Layard, Austen Henry (1849), *Nineveh and Its Remains*. 2 vols. London: Murray.

_____ (1853), *Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon*. 2 vols. London: Murray.

Lescot, Roger (1938), *Enquête sur les Yezidis de Syrie et du Djebel Sindjar* (Mémoires de l'Institut Français de Damas, tome V). Beyrouth. Reprint: Beyrouth 1975.

MacKenzie, David Neil (1966), *The Dialect of Awroman (Hawrāmān-ī Luhōn), Grammatical Sketch, Texts, and Vocabulary*. København: Ejnar Munksgaard.

_____ (1961a), *Kurdish Dialect Studies, I-II*. London: Oxford University Press.

_____ (1961b), "The origins of Kurdish," Transactions of the Philological Society 60: 68–86.

Malek, Michael (1989), "Kurdistan in the Middle East conflict," *New Left Review* 115: 19–94.

Mann, Oskar and Karl Hadank (1930), *Mundarten der Guran, besonders das Kandulai, Auramani, und Badschalani. (Kurdisch-Persische Forschungen, Abt. Ill, Band II)*. Berlin.

_____ (1932), *Mundarten der Zaza, hauptsächlich aus Siwerek und Kor*. (Kurdisch-Persische Forschungen, Abt. Ill, Band IV). Berlin.

Menzel, Theodor (1911), "Ein Beitrag zur Kenntnis der Jeziden," in Hugo Grothe, *Meine Vorderasienexpedition 1906 und 1907*. Bd. I. Leipzig: Karl W. Hiersemann: Ixxxix-cxxvi.

Minorsky, Vladimir (1920), "Notes sur la secte des Ahlé Haqq," *Revue du Monde Musulmane* 40–41: 19–97.

_____ (1921), "Notes sur la secte des Ahlé Haqq. II," *Revue du*

*Monde Musulmane* 44-45: 205-302.

_____ (1928), "Etudes sur les Ahl-i Haqq. I. "Toumari" = "Ahl-i Haqq"," *Revue de l'Histoire des Religions* 97: 90-105.

_____ (1943), "The Guran," *Bulletin of the School of Asian and African Studies* 11/1: 75-103.

Mokri, Mohammad (1970), *Contribution scientifique aux Études iraniennes: Recherches de kurdologie*. Paris: Klincksieck.

_____ (1977), *La grande assemblée des Fidèles de Verité au tribunal sur le mont Zagros en Iran*. Paris: Klincksieck.

Moltke, Helmuth von (1882), *Briefe über Zustände und Begebenheiten in der Türkei aus den Jahren 1835 bis 1839*. Berlin: E.S. Mittler und Sohn.

Mélikoff, Irène (1982), "L'Islam hétérodoxe en Anatolie," *Turcica* 14: 142-154.

Müller, Klaus E. (1967), *Kulturhistorische Studien zur Genese pseudoislamischer Sektengebilde in Vorderasien*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

Nebez, Jemal (1972), *Kurdistan und seine Revolution*. Berlin: National-Union Kurdischer Studenten in Europa.

Orhonlu, Cengiz (1963), *Osmanlı İmparatorluğunda aşiretleri iskan teşebbüsü (1691-1696)*. Istanbul: İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Yayınları.

Otyam, Fikret (1976), *Karasevdam Anadolu*, Istanbul: Çağdaş Yayınları.

Rambout, Lucien (1947), *Les Kurdes et le droit*, Paris: Le Cerf.

Saloman, Ghershon (1970), "Peace with the Kurds," *New Outlook* 14/4: 35-42, 14/5: 32-40.

Salzmann, Philip (1971), "National integration of the tribes in modern Iran," *The Middle East Journal* 25/3: 325-336.

Schmidt, Dana Adams (1964), *Journey Among Brave Men*. Boston: Little, Brown & Co.

Soane, Ely Bannister (1921), "A short anthology of Gurani poetry," *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland (New Series)* 53/01: 57-81.

Tilgner, Ulrich (1983), "Der Krieg in Kurdistan Khomeinis zweiter Krieg," *Iran-zamin* Ⅱ/2: 39-54.

Trowbridge, Stephen van Rensselaer (1909), "The Alevis, or Deifiers of Ali," *Harvard Theological Review* 2/03: 340-353.

Vanly, Ismet Chériff. (1970), *Le Kurdistan irakien: entité nationale. Étude de la révolution de 1961*. Neuchatel: Éditions de la Baconnière.

Wilson, Arnold Talbot (1931), *Mesopotamia, 1917-1920: A Clash of Loyalties; a Personal and Historical Record*. H. Milford.

Yonan, Gabriele (1978), *Assyrer heute. Kultur, Sprache, Nationalbewegung der aramäisch sprechenden Christen im Nahen Osten*. Hamburg/Wien: Geselfschaft für bedrohte Völker.